

Title	大規模開発プロジェクトと周縁社会 --エチオピア西部のダム/農場建設と地域住民の初期対応--
Author(s)	佐川, 徹
Citation	Kyoto Working Papers on Area Studies: G-COE Series (2010), 99: 1-34
Issue Date	2010-07
URL	http://hdl.handle.net/2433/155739
Right	© 2010 京都大学東南アジア研究所
Type	Article
Textversion	publisher



大規模開発プロジェクトと周縁社会
—エチオピア西南部のダム／農場建設と地域住民の初期対応—
Large-Scale Development Projects
and the Marginalized Society in Ethiopia

佐川 徹 Toru Sagawa

Kyoto Working Papers on Area Studies No.101
(G-COE Series 99)

July 2010

このグローバル COE ワーキングペーパーシリーズは、下記 G-COE ウェブサイトで閲覧する事が出来ます
(Japanese webpage)

http://www.humanosphere.cseas.kyoto-u.ac.jp/staticpages/index.php/working_papers

(English webpage)

http://www.humanosphere.cseas.kyoto-u.ac.jp/en/staticpages/index.php/working_papers_en

©2010

〒606-8501

京都市左京区吉田下阿達町 46

京都大学東南アジア研究所

無断複写・複製・転載を禁ず

論文の中で示された内容や意見は、著者個人のものであり、
東南アジア研究所の見解を示すものではありません。

このワーキングペーパーは、JSPS グローバル COE プログラム (E-4) :
生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点 の援助によって出版されたものです。

大規模開発プロジェクトと周縁社会

－エチオピア西南部のダム／農場建設と地域住民の初期対応－

佐川 徹

Kyoto Working Papers on Area Studies No.101

JSPS Global COE Program Series 99

In Search of Sustainable Humansphere in Asia and Africa

July 2010

大規模開発プロジェクトと周縁社会
- エチオピア西南部のダム / 農場建設と地域住民の初期対応 -
佐川 徹*

Large-Scale Development Projects and the Marginalized Society in Ethiopia

Toru Sagawa

Two large-scale development projects are in progress in Ethiopia. One is the building of the Gibe III dam in the upper Omo river of southwestern Ethiopia since 2006. The dam will be completed around 2012-13. It will significantly advance the ability of Ethiopian state to produce and supply the electricity. The other is the building of commercial farms. The government has leased many vast areas of land to foreign and domestic investors who plan to produce crops for export. The Daasanach are agro-pastoralist in the lower Omo river of southwestern Ethiopia. It is strongly feared that two projects will have negative influences on the subsistence activities and social relations of the Daasanach and neighboring groups. The purpose of this paper is to show the outline of two projects and to analyze how local peoples respond to two projects. First, I summarize the Daasanach's recognition on the dam. Next, I clarify the relation between a commercial farm owned by Ethiopian Highlanders and the Daasanach living around the farm. Then, I clarify the different attitude of the Daasanach toward the farm by each generation-set. Last, I focus on the transformation of Daasanach's self-image after the building of commercial farm.

はじめに

アフリカ大陸北東部に位置するエチオピアではこの数年、アフリカ最大規模のダム建設と広大な商業農場の整備が進んでいる。ダムに関しては、2006年から同国西南部を流れるオモ川にギベ第3ダムが建設中で、2012～13年に完成予定である。完成の暁には、同国の電力生産能力は現在の2倍以上になるといわれている。農場に関しては、数千～数十万ha規模の土地が数十年契約で、海外や国内の民間資本につぎつぎと貸し出されている。これらの企業は、世界市場での食糧価格高騰やバイオ燃料への需要増加を受けて、広大な作物生産地を求めてアフリカに進出している。

政府要職者や投資家は、二つの開発プロジェクトがエチオピアに経済成長をもたらすものであると語る。しかしプロジェクトによって、同国の周縁部に暮らす人びとはもっとも基本的な生存基盤である土地と水資源へのアクセスを失いつつある。エチオピアの西南端、オモ川の下流地域に暮らす農牧民ダサネッチは、オモ川の洪水につよく依存した生業様式を築いてきた。しかし、川上流にダムが建設されて洪水が「適切に管理される」ことで、その生業様式は根底から崩壊しかねない。また、彼らが暮らす地域ではすでに二つの商業農場が事業を開始しており、そこにもともと暮らしていたダサネッチは半ば強制的に退去させられた。

*日本学術振興会特別研究員 / 大阪大学人間科学研究科 (waraji.1125@gmail.com)

本論の目的は、このダムと農場建設の現状についておもにウェブ上の記事に依拠してまとめるとともに、ダサネッチでの現地調査にもとづいて、それらの建設が地域社会に及ぼす影響を与えつつあるのかを明らかにすることである。

本論の構成は以下のとおりである。まず次節で、ダムと農場の建設を歴史的に位置づけるために、エチオピア政府が牧畜地域に対してこれまでいかなる政策を採用してきたのかを検討する。第2節で、ダサネッチの生業様式や歴史経験を概観したあとで、第3節では、ギベ第3ダムの建設計画とそれに対するダサネッチの現時点での認識をまとめる。第4節では、エチオピアにおける民間資本による土地取得の現状を整理する。第5~7節では、筆者の調査村の隣にできたエチオピア北部人資本のトウモロコシ農場に焦点を当てて、まずダサネッチの人びとが農場といかなるやりとりを重ねているのかを紹介したあとで、農場建設がダサネッチ内部の社会関係に与えつつある影響をまとめる。最後に、迫りくる大規模な社会変化をまえに、ダサネッチが自己認識を再定義しようとしている状況について述べる。

本論のための現地調査は、2009年8~9月の約1カ月間おこなった。本論で用いる「現在」とはこの調査時期のことを指す。ダムや農場の建設は現在進行中の事態であるため、その後さらなる変化が調査地周辺に生じている可能性があることを、最初に断っておきたい。第3~4節で取り上げるウェブ上の記事は、本論執筆時点(2010年4月)で最新のものに言及できるよう努めた。

1. エチオピアの牧畜地域政策

東アフリカには、降水量が少ないだけでなく、それが年や地域ごとに不安定な(半)乾燥地域が広がっている。この地域は基本的に農業生産には適しておらず、ウシやラクダ、ヤギ、ヒツジなどの家畜を飼養し、その生産物に強く依存しながら生活する牧畜民が暮らしている。もっとも、ほとんどの牧畜民は家畜飼養だけを生業としているのではない。とくに河川沿いに暮らしている人びとは、川での漁撈に加えて、氾濫原や川辺林などを利用した農耕や採集、狩猟なども営んできた。

これら河川沿いの地域は、牧畜地域のなかでも国家や民間資本による開発プロジェクトが導入されやすい地域であった。各国政府は、牧畜民の利用する土地を「無主地(no man's land)」や「過少利用地(underused land)」と見なし、彼らが利用してきた河川沿いの土地に灌漑農場などを建設した。その結果、従来の牧畜民の生業様式や社会関係は大きく変化し、その定住化やプロレタリアート化が進展してきたことが報告されている¹。エチオピアもその例外ではない。本節では、エチオピアにおける牧畜地域政策の概要についてまとめよう。²

エチオピアは国土全体の61%が牧畜地域に分類される。牧畜地域とは、高度1500m以下、年間降水量400~700mmで、家畜飼養に強く依存した生活を営む人びとが多く暮らす地域の

¹ たとえば、ケニアでは1950年代からのバリンゴ湖における灌漑プロジェクト(Perkerra Irrigation Scheme)によりチャムスが(Anderson 1988)、1960年代半ばからの小規模灌漑プロジェクトにより北部のトゥルカナ、中部のイシオク、ガリッサ地域の牧畜民が影響を受けた(Hogg 1987)。

² 以下でおもに参照したのはつぎの文献である(Beruk 2008; Helland 2006; Mohammed 2004; Mohammud 2004; Hangman & Mulugeta 2008; Taffesse 2000; Yacob 2000)。

ことである。行政的には133郡(ワラダ)³を構成しており、29の民族集団、1,200~1,500万人が暮らしている。⁴

多くの牧畜社会は、19世紀末に北部の農耕地域を拠点としたエチオピア帝国の領土内に包摂された。その後の歴史は、牧畜民の土地権利はく奪と土地利用・管理体系の改変の歴史とあってよい。とくにハイレ=セラシエ1世統治下の1955年になされた憲法改訂130条では、すべての放牧地(all grazing lands)が「無主地」として国有化された。また1960年のCivil Code article 1168では、過去15年間に土地税を払っていない国民は土地所有の権利を喪失することになった。牧畜民はそれに先立つ1949~50年に制定された税法により、土地税ではなく家畜税を払うことになっていたため、土地への権利を失った。

これらの法制度の整備と並行して、牧畜民の乾季放牧地などを流用した農場建設や自然公園の設置が進んだ。過去60年間で、合計約260万haの放牧地がそれらの目的に転用されたという報告もある⁵。そのもっとも代表的な事例が、エチオピア中央部のアワシュ渓谷における農場や自然公園の整備事業である。当該地域に暮らすアフアールやカレイユがこの事業から受けた負の影響については、詳細な報告がなされている(Ayalew 2001; Getachew 2001)。

エチオピアでは1974年に帝政が崩壊して軍事政権が成立したが、牧畜民から土地をく奪する政策は継続した。たとえば、同国西南部の農牧民ツァマイが暮らす地域では、軍事政権末期の1990年に4千haの土地が収用されて、綿花農場が建設された(Melesse 2004)。

この軍事政権を1991年に打倒して政権の座についたのが、現在のEPRDF(Ethiopian People's Revolutionary Democratic Front)政権である。この政権下で1995年に施行された現憲法は、牧畜民の土地権利を認めた点で画期的なものであった。憲法第40条第5項には「エチオピアの牧畜民は、みずからの土地から追い出されない権利だけでなく、放牧や耕作のために土地を自由に扱う権利を有する」(FDRE 1995)と記されている。近年では、牧畜民の権利向上のための市民社会、政治家、国際組織による動きも盛んになってきた。たとえば、1998年には牧畜地域の開発を目的としたローカルNGOによりPastoral Forum Ethiopia (PFE)が結成され、これまで4回の「牧畜開発会議」を開催している。1999年からは、1月25日が「エチオピア牧畜民の日」として制定されて、毎年この日には牧畜民の権利向上を目的とした啓蒙活動がおこなわれている。2002年には、牧畜地域選出の国会議員らが中心となって牧畜問題常任委員会(PASC: Pastoral Affairs Standing Committee)が設置された。

牧畜民の権利向上に資する動きが進展しつつある一方で、現実に施行されている政策の内容をみても、現在でも中央政府が「農耕化や都市化をとおした定住化」政策を志向していることが分かる。たとえば、2000~04年の「5カ年開発計画(The Five-Year Development Plan)」では、小規模灌漑の導入により「ノマディックな生活を少しずつ弱める」必要性を指摘しているし、2003年の「農村開発政策戦略(Rural Development Policies and Strategies)」にも、「持続可能な開発」のために「灌漑の開発に基盤を置いた定住化」が必要であると記されている。

³ エチオピアの行政区は、上から州、県、郡(ワラダ)、農民組合(カベレ)に分割される。

⁴ Pastoral Forum Ethiopia のウェブサイト上の情報より(<http://www.pfe-ethiopia.org/about.html>: 2010年2月22日アクセス)。

⁵ アフアール州の617,300haが天水農地や灌漑農地、自然公園に、ソマリア州の417,000haが天水農地と灌漑農地に、ボラナ県の130万haが農地に、サウスオモ県の121,000haが農地と自然公園に、ガンベラ州の10万haが農地と自然公園に転用されたという(Beruk 2004)。

この傾向をよく示すプロジェクトを、最近の新聞記事から一つ取り上げておこう。エチオピアの国内英文紙 Addis Fortune の 2010 年 1 月 25 日号に、‘Awash Irrigation to Help Pastoralists Settle’ という記事が掲載されている。記事によると、2006 年 5 月からオロミア州イーストシヨワ県のファンタレ郡とボセト郡で灌漑プロジェクトが進められている。近くを流れるアワシユ川から 60km のパイプを引いて 1.8 万 ha の土地を農業向けに灌漑し、その土地を周辺に暮らす約 3.6 万世帯のカレイユに無料利用させることが目的の一つである。

記事のなかでプロジェクトのチーフエンジニアは、同プロジェクトが「コミュニティに自らの精神の一式(mind set)を変える技術を採用させることができる」ものであり、また「他の牧畜地域のモデルにもなりうる」ものだと述べている(Addis Fortune 2010/1/25)。この「精神の一式」とは、エチオピアの高地地域に暮らす人びとが、低地に暮らす牧畜民へ付与してきた否定的イメージを含意していると推測できる。カレイユの多くは、家畜飼養に依拠した半遊動的な生活を送ってきた。そのような牧畜民を、高地の人びとは「ゼラン(zelan)」と呼ぶ。これは、「目的もなくふらふらした生活を送る無法状態にある人びと」という侮蔑的な含意を有したことばである。上記の発言からは、「灌漑プロジェクトをとおした農耕化と定住化こそが、未開で野蛮なゼランを文明化させることができる」という考えが見て取れる。

以上をまとめれば、エチオピアでは帝政期や軍事政権期には、牧畜民の利用する土地を「無主地」としてはく奪した。現政権は牧畜民の土地に対する権利を憲法上で保障したものの、現実にはその土地を「過少利用」と断定し、開発プロジェクトをとおして定住化の促進を試みている。現在ダサネッチに影響を与えつつあるダムと農場の建設は、牧畜民の生活に突発的に降りかかってきた災厄なのではなく、彼らが近代国家に包摂されて以降連綿と続けられてきた、牧畜民の周縁化を強いる政策の延長線上で理解する必要がある。

2. ダサネッチの概要

つぎに本論の対象となるダサネッチについて概説しておこう。ダサネッチ(Daasanach)は、エチオピア、ケニア、スーダンの三国国境付近に暮らす農牧民である(図1)⁶。エチオピアには約4万8千人が、ケニアには数千人がそれぞれ生活している。筆者が現地調査をおこなっているエチオピア側のダサネッチが暮らす地域は、行政的に南部諸民族州サウスオモ県ダサネッチ郡に属する。この地域は、三国いずれの首都からも直線距離で600km以上離れた場所に位置しており、アクセスは容易ではない。エチオピアの首都アディスアベバからダサネッチ郡の行政中心地である小さな町オモラテまでは、車で丸三日かかる。

ダサネッチのおもな生業は牧畜と氾濫原農耕である。彼らの居住地域の中央を流れるオモ川は、毎年7~8月にかけてエチオピア高地の降水を受けて氾濫する。この水が高地から運んできた肥沃な土壌は、土地の生産力を上げる。平野に達した水が引くと人びとはそこにモロコシなどを播種し、乾季である12~2月に収穫を迎える。ダサネッチランドは、降水量が400mm程度の半乾燥地域である。降水量が少ない地域で生活を営む際には、乾季にいかん食糧を確保するのがもっとも困難な課題となる。しかしこの地では、オモ川の恵みによって

⁶ 以下のダサネッチに関する記述は、いずれも佐川(2009)に拠っている。

乾季にも豊富な量の穀物を確保することが可能となっており、人びとが飢えに苛まれることも少ない。また、乾燥地域で家畜を飼養するためには乾季に水と牧草をどう確保するのがもっともむずかしい問題だが、ダサネッチの家畜たちは川の水と氾濫が引いたあとに生えてくる青草のおかげで、乾季でも安定した搾乳量を保つ。

オモ川の恵みに依存しているのはダサネッチだけではない。ダサネッチの近隣に暮らすいくつかの民族は、作物生産を不十分かつ不安定な天水農耕のみに頼っている。そのため彼らは干ばつに見舞われると、氾濫原で生産された穀物を求めてダサネッチの地を訪れる。ダサネッチはみずからを「オモ川の人びと(*gaal wariet*)」と呼んで、「いつも腹が空いている」近隣民族に惜しみなくモロコシを分け与える自分たちの気前のよさを、誇らしげに語る。

つぎに、ダサネッチと国家との歴史的関係を概説しておこう。ダサネッチが暮らすオモ川下流平原は、東アフリカで「開発」現象からもっとも遠くにあり続けた地域の一つである。彼らは19世紀末にエチオピア帝国軍により軍事征服され、その居住地域の大部分は同国の領域内に包摂された。その後ダサネッチは、イタリア占領期(1936~1941)にいたるまで時の政府と軍事的協力関係を築いたこともあった。しかし1941年以降、この地域は中央政府からほぼ放置状態に置かれた。その結果、筆者が最初の現地調査をおこなった2001年当時ですら、村に住む少なからぬダサネッチが「エチオピア」という語を知らなかった。

ダサネッチの地に初めて大きな開発プロジェクトが持ち込まれたのは、1980年代半ばである。1974年に成立した軍事政権が、北朝鮮からの援助を受けて綿花農場を建設した。予定面積は2万haであったが、実際に耕作が進んだのは数百haであった。この建設にともない高地地域からダサネッチランドにいたる乾季車道が整備され、またオモラテの町が建設された。綿花農場は、1991年の軍事政権崩壊によって閉鎖されたが、その後もオモラテの町は発展を続けた。とくに、2000年代半ばからは町から村への影響が急速に強まっている。そして現在、ダムと農場の建設によりダサネッチが暮らす土地は「開発」の焦点になりつつある。

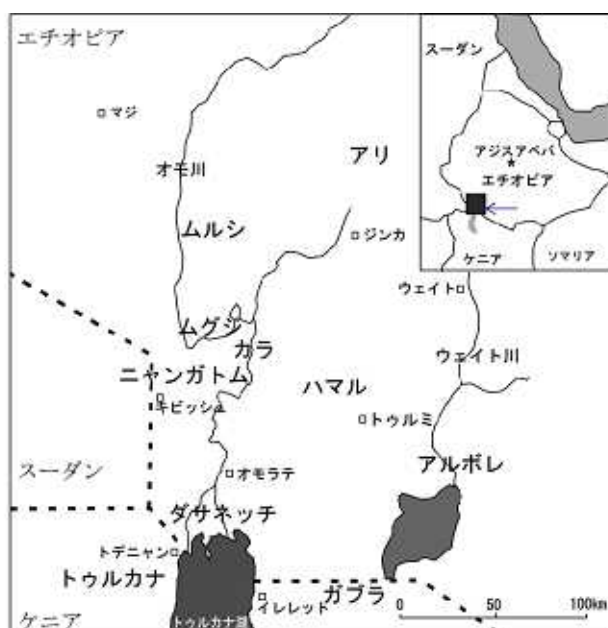


図1．ダサネッチと周辺地域

最後に、ダサネッチと「ウシュンバ」(ushumba)との関係について述べよう。ウシュンバとは、おもに北方のエチオピア高地からやってきた人のことを指す。そのため、以下ではウシュンバのことを「高地人」と記す。現在オモラテの町に暮らしている高地人の多くは、エチオピアの中部や北部から移住してきたアムハラ人や、エチオピアの中南部から移住してきたワライタ人やコンソ人などである。これに加えて、ダサネッチの村を離れて学校に入学し、卒業後も町に住み政府関連の仕事をするダサネッチも「高地人のような生活」をしていることから、村に住むダサネッチからウシュンバと呼ばれることが多い。

ダサネッチは、高地人に対して根強い不信感を抱いている。ダサネッチが本格的に高地人と接触したのは19世紀末、つまり彼らがエチオピア帝国に軍事征服されたときである。ウシュンバとは、なによりかつて彼らの土地を蹂躪し、人びとを殺戮し、家畜を奪っていった人びと、そしてその後現在にいたるまで支配を押し付けた人びと、すなわち彼らにとっての「国家」を代表する人びとのことである。今日の農場建設によって、この高地人との関わりが村に暮らすダサネッチにとっても強まりつつある。

3. ダム建設とダサネッチの認識

ギベ第3ダムの概要

ダサネッチに大きな影響を与えつつある一つ目のプロジェクトは、ギベ第3ダム(Gibe III)の建設である。まず、いくつかの文献に依拠してこのダムの概要をまとめておこう。⁷

ギベ第3ダムは、エチオピア中西部にその流れを発するオモ川の上流部で現在建設中のダムである。首都アディスアベバからは約300km南西に位置する。2006年7月にイタリアのサリーニ建設(Salini Costruttori S.P.A)が入札し、すぐにその建設を開始した。当初の完成予定は2012年だったが、最近の報道によれば2013年に延期された。2010年2月時点では、その3分の1の工事が完了しているという。このダムは、高さ240m、貯水槽全長151kmの「サハラ以南で2番目に巨大なダム」(BBC News 2009/3/25-26)であり、完成すれば国内の電力生産能力が2008~09年現在の2倍以上になると試算されている。コストは15.5億ユーロ(21.1億米ドル)で、これは「エチオピア史上最大規模のインフラ事業」(International Rivers 2009/9/18)である。主要ドナーは、アフリカ開発銀行と欧州投資銀行である。

ギベ第3ダムの建設予定地の上流ではすでに2つのダムが建設を終えている。ギベ第1ダムは1997~2003年に建設がおこなわれ、2004年2月から稼働している⁸。ギベ第2ダムは2004年に建設が開始され、予定より2年以上遅れた2010年1月14日にエチオピアのメレス首相らも列席して開通式がおこなわれたが、その約10日後にトンネルが崩落し、その後は操業停止状態にある。双方とも、ギベ第3ダムに比べれば規模は小さい。ギベ第3ダムの年間電力生産量は6500GWhであるのに対して、第1ダムは772GWh、第2ダムは1635GWhである。

エチオピア政府がギベ第3ダムを建設する目的はおもに二つある。まずは、国内電力の供

⁷ 参考にしたのはおもに以下の文献である(Campagna & CEE Bankwatch Network 2008; BBC News 2009/3/25-26; Hathaway 2009; International Rivers 2009)。

⁸ この建設にともない1.964世帯の約1万人が強制的に退去させられた。彼らの退去後の生活についてはKassahun(2004)を参照。

給源としての役割である。政府は、2005年に発表した25年エネルギーマスタープランの中で電力生産と供給の拡大戦略を記している(Campagna & CEE Bankwatch Network 2008: 4-5)。その目玉の一つがギベ第3ダム建設であり、国民からの期待も大きい。2009年9月13日付のエチオピア英文国内紙Capitalは、エチオピア暦2002年⁹の重大ニュースをまとめているが、一年間で「もっとも有名なプロジェクト」には「ギベ第3ダム水力プロジェクト」を挙げている(Capital 2009/9/13)。同国では首都でも停電が相次いでおり、とくに都市部に暮らす人びとは電力の安定的供給を国家が果たすべき最重要課題の一つとして認識している。

ダム建設の二つ目の目的は生産した電力の輸出である。ギベ第3ダムが完成し稼働を始めると、エチオピアは国内消費量を大きく上回る電力生産能力を獲得する。政府は近隣諸国に余剰電力を販売することで、毎年4.07億ユーロの歳入を見込んでいる。輸出先としては、ケニアに500MW、ジブチとスーダンに各200MW、イエメンに50MWが予定されている。

このエチオピア政府によるダム建設政策に対しては、大きく分けて二つの批判がある。一つ目はエネルギー政策としての批判である。ギベ第3ダムが建設されると、エチオピアは電力供給の約96%を水力に依存することになるが、単一の要素に過度に依存した電力供給のあり方は、エネルギーの安全保障上好ましくない。降水量が極端に少ない年には、電力供給は不安定になる。この見地からは、これ以上のダム建設を進めるのではなく、風力や太陽光などより多元的な電力の生産体制を築くことが必要であると指摘される(International Rivers 2009)。もう一つの批判は、ダムの建設が地域住民の生活にネガティブな影響を与えかねないことに対する批判である。これに関しては次項でまとめよう。

下流地域への影響

ダム建設は、まず建設地域周辺に暮らす人びとに多くの影響を与えるが、以下で焦点を当てたいのは、オモ川下流地域やオモ川が流れ込むトゥルカナ湖周辺に暮らす住民への影響である。その影響とは、ダムが川上流に建設されることで、毎年下流住民に恵みをもたらすオモ川の氾濫がおこらなくなる可能性があり、それが氾濫に依存した下流住民の生業構造に大きな打撃を与えること¹⁰、またオモ川の水量が減少してトゥルカナ湖の水位が大きく下がる可能性があり、それがトゥルカナ湖に依存した生業を営む人びとに大きな打撃を与えること、の2点にまとめられる。International Riversは、ダム建設により影響を受ける住民数を以下のように見積もっている。オモ川下流平原で氾濫原農耕に直接従事する地域住民(indigenous peoples)が10万人、オモ川下流平原で氾濫に部分的に依存する地域住民が10万人、ケニアでトゥルカナ湖にサポートされて生活する人口が30万人(International Rivers 2009)。

この懸念されるネガティブな影響に対して、ダムを建設する政府や企業はいかなる立場を取っているのだろうか。イタリアのコンサルティング会社Centro Elettrotecnico Sperimentale Italiana (CESI)は、エチオピアの電力開発を担う国有企業Ethiopian Electric Power Corporation (EEPCo)からの委託を受けて、ダム建設が建設地周辺と下流地域に与える影響に関する長大

⁹ エチオピアはグレゴリオ暦とは異なる暦を採用している。エチオピア暦2002年は、グレゴリオ暦の2008~09年に相当する。

¹⁰ オモ川下流地域は、多くの化石人骨が発掘されていることが理由となって、1980年にユネスコの世界遺産(文化遺産)に登録されている。また、同地域には二つの国立自然公園がある。ダムの建設は、世界遺産や公園周辺の生態系を改変してしまうという観点からも批判されている。

なアセス報告書を公開している (Agriconsulting Spa 2008; CESI Spa 2009)。以下では報告書に写し出されている政府や企業の立場を検討してみよう。

報告書でまず強調されているのが、「ダム建設はオモ川下流地域の住民を洪水の恐怖から守ることになる」という主張である。これは、オモ川の毎年の洪水が下流住民に被害を与えているという認識に依拠した論理である。たしかに、洪水が住民の生活に悪影響をおよぼすことはある。その代表的な例として挙げられるのが、2006年8月の洪水である。この洪水に関する州政府報告書 (SNNPRS 2006)によると、2006年8月21日時点で、ダサネッチ郡とその北に隣接するニャンガトム郡では洪水のために364人が死亡し、15,000人が家屋を追われ、3,000頭以上の家畜が死亡し、15の村が完全に破壊されたという。報告書は、この洪水を「過去百年で最悪の洪水」と記している。

上述のアセス報告書でも、この2006年洪水の「破壊的影響」について少なくとも4か所 (Agriconsulting Spa 2008: 42-43, 95, 130, 141)で触れられており、それに対してダム建設が「氾濫のもっとも大きな時期に、川の流れの完全な制御を可能にする」 (Agriconsulting Spa 2008: 141) と記している。また、ギベ第3ダムの建設が「洪水の制御」を可能にすることは、エチオピアのメレス首相も言及している (BBC 2009/3/25-36)。加えて、筆者のダサネッチでの聞き取り調査によると、「大洪水でオモ川がダサネッチを殺したのでダムをつくる」と郡の政府役職者が述べていたという (2009/8/20、60代男)。

この主張に対してまず指摘すべきは、2006年の洪水の被害が誇張されていることである。筆者は、洪水の発生時にダサネッチの村に滞在していた (佐川 2007)。洪水が大規模なものだったことは確かである。例年では水のおよばない地域にまで氾濫したため、多くの集落が水に囲まれて孤立し、筆者の友人の穀物庫も水に流された。しかし、政府報告書が記す「364人の死者」、あるいはそれに類する数の死者が出たとの話は耳にしなかった。2009年に現地を再訪し聞き取り調査をした結果、実際の死亡者数は数名～10名程度と推測できる。

もう1点指摘しておくべきは、2006年の洪水で多くのダサネッチが被害を受けたものの、2006～07年にかけては豊作だったことである。氾濫原農耕を営むダサネッチにとって、川が大きく氾濫することは、同時に水が引いたあとに耕作できる広大な土地が用意されることでもある。たとえば筆者の友人である男性は、例年なら穀物庫2つ程度のモロコシを収穫できるだけであるが、2006～07年にかけては4つの穀物庫にモロコシが一杯となった。また2006～07年にかけては低地での降雨量が少なく、オモ川から離れた地域に暮らす近隣のハマルやトゥルカナは十分な量の穀物が収穫できなかった。そのため、飢えに苛まれたハマルやトゥルカナはダサネッチの元を訪れ、ダサネッチが彼らにモロコシを提供した。

以上の点を考慮すれば、洪水が下流地域の住民の生活に被害をもたらす年があることはたしかだが、それは政府報告書が記したほどの規模のものではないし、洪水は下流地域の住民とその周辺住民に恵みをもたらすものでもある。長期的にみて住民により多大な負の影響を与えるのは、「数年に一度大洪水が来て被害がでること」ではなく、「上流で川が制御されて今後洪水が起らなくなること」である。それにもかかわらず、洪水の負の側面を表す数字が誇張されたままひとり歩きして、ダム建設を正当化する論拠として用いられている。

ただし、政府や企業側は氾濫が人びとの生活にとって不可欠なことも認識している。アセス報告書、とくにその Appendix 部分には、下流住民が氾濫に依存した生業様式を築いており、

ダム建設がそれに負の影響を与えるおそれがあると記述されている。では、どのような論拠でダム建設は正当化されるのだろうか。ここで二つ目の主張が登場する。アセス報告書の第6章では、洪水が起こらなくなることへの対策として、「10日間の放水による人工洪水」が提案されている。これによって、被害をもたらしかねない洪水を予防しつつ、洪水の有するポジティブな側面は人工的に作り出すことができるのだという。

これに対して、ダム建設が下流域にもたらす影響を政府からは独立して査定した専門家集団は、以下のような反論を加えている(ARWG 2009)。従来の洪水では、氾濫した水は氾濫原に2~3カ月程度とどまっており、10日間だけの人工放水ではその機能を代替しえない。また、人工放水では従来のそれと水の流れがかわってしまう。そもそも、人工放水はダムを管理する側の「善意」によっておこなわれるので、毎年それがなされるという保証もない。これらの観点から、人工放水という提案は「ダム建設先にありき」の結果として導出された、不十分な対策でしかないと批判されるのである。

ダサネッチのダムに対する認識

では、このダムがもたらす影響について下流域の住民はいかなる説明を受けてきたのだろうか。結論を先にいえば、政府や企業が説明をした時期はきわめておそく、対象とした人数は少なく、大部分の住民にはその説明の内容が伝わってこなかった。

上述のアセス報告書によれば、下流域の住民への最初の説明会(consultation)がなされたのは2007年12月である。ダム建設は2006年の夏に開始されているから、これはすでに建設から1年以上たったあとである。また説明会はハマルとダサネッチの人びとに対して計12回、参加者285名におこなわれたとされる。2007年の人口統計資料(Population Census Commission 2008)によると、エチオピアに暮らすダサネッチの人口は48,067人、ハマルの人口は約46,532人¹¹であるから、これは全人口の3%程度を対象としたものでしかない。¹²

筆者が2009年8月に聞き取り調査をしたダサネッチのなかで、もっとも早くダム建設についての情報を得ていたのは、郡政府の要職を占めていた人物で、彼は2007年1月ごろに県都ジンカでの会議で聞いたという。一方村に住むダサネッチの大部分は、アムハラ語ができる人物が2009年2月ごろにラジオをとおして知っていたのを除けば、政府関係者や町の高地人の知り合いから2カ月程度前、つまり2009年6月ごろに聞いたのが初めてだという。彼らは、説明会で話された内容どころか、説明会が開かれたこと自体を知らなかった。

耳にしたのは最近のこととはいえ、2009年8月の時点でダムが建設中であることを知っていたダサネッチは存在していた。では彼らは、ダム建設に対してどのような認識を抱いているのだろうか。筆者の滞在中に、ダム問題がダサネッチ同士の日常会話で語られていたことは皆無であった。この観察を補強するように、母親や妻はダムの話について知っていてもその息子や夫は知らない事例があった。息子や夫にその理由を聞くと、「町へ行く人だけが知っている」と答えた。つまり、町でダムの話聞いてきた母親や妻は、その内容を世帯内や

¹¹ ただしこれは、ハマルに隣接しほぼ同じ言語を話すものの、異なる民族集団として分類されることの多いバナナの人口も含まれた数値である。

¹² 2008年2月には、アディスアベバからの調査チームが、下流域周辺のコミュニティメンバーにダム建設がもたらす影響について聞き取りを実施したという(Hathaway 2009: 5-8)。

村落内でほかのダサネッチと話題にしてこなかったということである。また、2009年8月時点ではオモ川の水位は低いままであり、多くのダサネッチが「今年は洪水がないだろう」と悲観的に述べていた。しかし、洪水が来ない理由をすでに建設中のギベ第3ダムと結びつけて彼らが説明することもなかった。¹³

自分たちの生活を根底から覆しかねないダム建設の事実を知りながら、人びとがそれを話題にしていないことは奇妙にも思える。この背景には、政府や企業の説明不足に加えて、ダサネッチの人びとが「洪水が今後永遠に来なくなる」という考え自体になじみがないことも関係しているだろう。それはつぎの事例からもうかがえる。筆者が「ダムが建設されたら洪水が来なくなるようだが…」と尋ねると、多くの人びとが「今年は来なくても、来年は来るから大丈夫」、「地をほりいもを食べ、ウシの皮を食べて、つぎの洪水までしのぐ」と答えた。

この発言にあるように、これまでの歴史でオモ川の洪水は「今年は来なくても、来年は来る」ものであった。オモ川の水量が少なく氾濫しなかった年を人びとは「オモ川が拒絶した」年と呼び、食糧確保に苦しんだ年として語る。モロコシは十分な収穫をあげることができず牧草も不足する。そのような年に生存手段を与えてくれるのもまたオモ川であった。これらの年は、飢えをしのぐために食べた魚や木の実の名前とともに記憶されている。川での漁撈や川辺林での採集に依存して飢えをのりきると、翌年あるいは翌々年には川は洪水して再び恵みをもたらしてくれた。

ダサネッチは一年を12ヶ月に分ける暦をもっており、オモ川の氾濫が始まる7月が一年の開始の月になっている。ダサネッチ語で「オモ川」と「一年」はともにワル(*war*)という語で示される。つまりダサネッチにとって「一年」とはオモ川の氾濫に始まり、いったん川の水位が下がり、再び川が増水を開始するまでの期間を指しているのである。人びとの一年の生活パターンも、川の水位の増減と深く結びつきながら形成されてきた。ダサネッチはオモ川がもたらす恵みを十分に認識していて、川の流れるさまを唄に歌い氾濫によって大地に豊かさがもたらされるようカミに祈りを捧げる。彼らはこの地域に長年暮らすなかで、いわばオモ川に対する「信頼」とでも呼べる感情を培ってきたといえる。そのオモ川の洪水が今後永久におこらなくなるということは、彼らにとって想像の範疇外にあるのではないだろうか。そのことが、町で聞いてきたダムの話を村でとりたててしないことの、そして2009年に洪水が来なかったことをダム建設と結び付けて説明しないことの背景にあると推測できる。

ただし急いで付け加えておくべきは、「オモ川の洪水が今後永久に起こらなくなる」ことがこれまで彼らの想像の範疇外にあったからといって、人びとがそのことを理解できないわけではない点である。彼らにダムが建設されることがなにを意味し、それがどのような影響をもたらすかを説明すれば、彼らは事態の深刻さを認識する。たとえば筆者からややくわしい説明を受けた女性は、つぎのように語った。

語り(2009/8/15、40代女)

オモ川だけがいいのだ。洪水があって家畜が流される、人が死ぬ。逃げていく人もいる。やや小高い土地にいる人は死なない。土地が乾くとモロコシを播く。それを収穫すると胃が満

¹³ 2009年はオモ川下流一帯でほぼ洪水がなく、ギベ第3ダム建設の影響がすでに出始めていると推測する組織もある(Survival International 2010/2/25)。

足する。オモ川がなくなるとすべてが終わる。家畜もなく穀物庫もない。家畜は全滅する。一人も生きられない。死だけだ。

反対運動の展開

以上みたように、ダサネッチにおいてはまだダム建設に対する明確な反応は生じていない。一方、ギベ第3ダムの建設は「今日のアフリカ大陸で、もっとも貧弱にプランされた水力プロジェクト」(Los Angeles Times 2009/5/14)と米国の新聞で取り上げて批判されているように、国際社会やケニア国内においては反対運動が展開されている。

ケニアで反対運動がなされる理由は、ケニア北西部に位置するトゥルカナ湖に注ぐ水の80~90%をオモ川が提供しているからである。そのため、ダムが建設されて川の水量が減ることで、トゥルカナ湖の水位は7~10m程度下がることになるかと予測されている。これが、トゥルカナ湖周辺に暮らして、湖での漁撈などに依存して生活を送る人びとに多大な影響を与えることは容易に想像できる。そのため、ケニアの国内紙は「エチオピアのダムプロジェクトがトゥルカナ湖を殺す」(The Standards 2009/3/3)といったセンセーショナルな見出しをつけて、ダムの建設を報道している。

2008年11月には、トゥルカナ湖周辺の7民族がFriends of Lake Turkana(FoLT)という組織を結成した。この組織は「Save Lake Turkana」キャンペーンを展開し、主要ドナーであるアフリカ開発銀行や欧州投資銀行にダム建設のための融資取りやめを迫る書簡を送り、また2010年1月にはケニアの4か所で抗議デモをおこなった¹⁴。トゥルカナ湖の西岸に暮らすトゥルカナ人から選出された国会議員も、ダム建設が地域住民に多大な負の影響を与えないと懸念を表明している(The Standards 2009/4/5)。もっとも、ケニア政府はすでにエチオピア政府との間に電力購入に関する契約を済ませており(The Standards 2010/1/21)、この運動を支持する可能性はほとんどない。

国際組織もダム建設への反対運動を展開している。その先頭にたっているのが、河川に依存して暮らすコミュニティの権利を守るための活動などをおこなうInternational Riversであり、FoLTもこの組織と協力して運動をおこなっている。International Riversは、そのウェブ上でギベ第3ダムに関する特設ページを設けて関連情報を更新している¹⁵。また先住民運動などに強く関わるSurvival Internationalも、ウェブページ上でアフリカの「絶滅危機部族」(The world's threatened tribal peoples)として、ブッシュマンなどとともに「Omo Valley Tribes」を挙げている¹⁶。英国の放送局BBCは、2009年3月にギベ第3ダムの建設を主題としたテレビ・ドキュメンタリーを放送し、現在でもウェブページ上にその内容を掲載している¹⁷。

それに対してエチオピアでは、政府による報道機関やNGOへの締め付けが厳しく、反対運動はほとんどなされていない(International Rivers 2009: 5)。実際、エチオピア英文国内紙のウェブページ上でダム関連の記事を調べても、批判的な記事は見つからない。2009年7月にエチオピア政府は、ギベ第3ダムのさらに下流に候補地が設定されているギベ第4ダムの建

¹⁴ くわしくはFoLTのウェブサイトを参照。<http://www.friendsoflaketurkana.org/>

¹⁵ <http://www.internationalrivers.org/node/3773>

¹⁶ <http://www.survivalinternational.org/tribes/omovalley>

¹⁷ <http://news.bbc.co.uk/2/hi/africa/7955700.stm>

設を中国企業と契約した(Daily Nation 2009/7/9)。一方で、2010年1月に操業を開始したギベ第2ダムは、トンネルが崩落して操業停止に陥っており、エチオピアのダム建設政策の今後は十分な見通しがたっていない(International Rivers 2010/2/5)。もっとも、「エチオピア史上最大規模のインフラ事業」であるギベ第3ダムの建設を政府がみずから撤回することは考えにくく、国際組織らによるドナーへの働きかけがどれほどの効果を発揮するかに、今後の展開はかかっている。¹⁸

4. 商業農場の建設

ギベ第3ダムの建設は、2013年の完成が近づくにつれて、ダサネッチの生活のあり方を根底から覆してしまいかねないプロジェクトである。彼らの生活にすでに影響を与えつつあるのが、商業農場の建設である。本節では、エチオピアにおける民間資本による土地取得の現状をまとめたあとで、ダサネッチでの商業農場の概要についてみていこう。

エチオピアにおける土地取得

過去数年間にエチオピアでは、海外と国内双方の投資家や企業による商業農場向けの大規模な土地取得が進行している¹⁹。政府による公式発表がないため、正確な契約件数や面積などは不明であるが、海外や国内メディアのウェブ上記事から状況を探ってみよう。各記事が報じる数値には少なくないずれがあるものの、大きな事態の流れを知ることはできるだろう。

- ・政府機関が商業農場に適した160万haの「未開地」を同定しており、すでに8,420の国内外の投資家が商業農場のライセンスを受領している (Reuters 2009/7/31)
- ・政府は合計270万haを海外投資家に提供する予定であり、2009年10月までに160万haを海外投資家に提供する予定である。1haあたり年間10~12ドル、50~99年契約での貸出が多い(L'Hebdo 2009/9/3)
- ・投資家によりすでに所有されている商業農場は約39万haである (Addis Fortune 2009/12/6)
- ・2004~09年の半ばまで、最小でも607.760ha(国内投資家36.2万、海外投資家24万)が投資家の権利下に置かれることになった (Genet 2009/8/12)
- ・2013年までに、政府は300万haの遊休地(idle land)を貸し出す予定であり、これは現在の同国全耕作地の5分1以上におよぶ(The Guardian 2010/1/15)
- ・過去2年でエチオピアでは未開地(virgin land)が50万ha以上提供された(Grain 2010/1)

土地を取得している海外企業としては、2009年にガンベラ州の土地30万haを取得し、すでにコメ、トウモロコシ、オイルパーム等の生産をおこなっているインド企業の Karuturi

¹⁸ 2010年5月になって、中国工商銀行(ICBC)がギベ第3ダム関係のプロジェクトに500万ドルの融資をおこなうことに同意したとの報道がなされた(International Rivers 2010/5/13)。

¹⁹ エチオピアでは、1975年の土地法によりすべての土地は国有化されているため、正確には土地「貸出」と表記すべきであるが、貸出契約年数は50年以上のものが多く、賃貸料もきわめて安いいため、実質的には「取得」という語が喚起するイメージに近い。そのため、本論では土地取得と記すことにする。

Global Ltd と²⁰、オロミア州アワサ南部に3千 ha、ガンベラ州にコメ生産のための1万 ha、さらにガンベラ州に25万 ha を獲得しつつあるサウジアラビア資本の Saudi Star Agricultural Development が、メディア報道でしばしば取り上げられている。これ以外の代表的な海外企業の土地取得としては、ドイツの Flora Eco Power が1.3万 ha、イタリアの Fri-El Green Power が3万 ha、アメリカの Ardent Energy Group が1.5万 ha などである(L'Hebdo 2009/9/3)²¹。また上の一つの記事にあるように、国内資本による土地取得も多い。ただし、記事の数値には海外企業の現地法人による取得も含まれている。

この土地取得の動きはエチオピアにかぎられたことではなく、2000年代、とくにその後半期に入ってからアフリカ全土で広がりつつある動きである。たとえば、過去2年で少なくともサハラ以南アフリカの28カ国で3千万 ha の土地がおもに海外企業に契約されたという報道や(Grain 2010/1)、2008年半ばから2009年までに、アフリカで180件の「土地強奪(land grab)」取引がなされたとの報道がある(Voice of America 2010/1/28)。この背景には、世界的な食糧価格の上昇を受けて穀物生産地を確保しようとする、中東の産油国、経済発展が著しいアジア諸国、そして欧米諸国の企業の進出がある。これらの企業は同時に、環境問題がグローバル・イシュー化するなかで「エコフレンドリー」な燃料として商品価値の高いバイオ燃料の生産地獲得も目指している。安くて豊富な土地があるアフリカは、「最後のフロンティア」としてその争奪の主戦場となっているのである。

この動きに対しては、市民社会組織や研究者が「土地強奪」、「アグリ/バイオ植民地主義」、「帰ってきたアフリカ分割」といった批判をおこなっている。また2009年4月25日にアフリカ連合(AU)の高官は、「アフリカ諸国は[海外投資家に対して]適切な交渉力をもつ立場になく」、土地取得の「ペースが速すぎて、コミュニティに利益を与えるかどうか予測できない」と懸念を表明している(Ethiopian Review 2009/4/30)。最近になって国際的なルール作りの動きも始めている。たとえば日本国外務省は、2009年9月23日に世界銀行、世界食糧機関(FAO)、国際農業開発基金(IFAD)、国連貿易開発会議(UNCTAD)と共催で、「責任ある国際農業投資の促進」会議を開催している。²²

エチオピア国内でこの動きはどう受け止められているのだろうか。外国に拠点を置くメディアは、ギベ第3ダム問題同様に、エチオピアの国内メディアが土地取得問題についても沈黙を守っていると書いているが(Ethiopian Review 2009/12/4)、実際にはエチオピアの英文国内紙も土地取得のニュースを報じている。もっとも内容は批判的というよりも、どちらかといえばそれを擁護する姿勢がみられる。一方、実際の土地取得の舞台となっているガンベラ州のアニユワ人やオロミア州のオロモ人が海外で形成した組織は、海外メディアをとおして土

²⁰ Karuturi Global Ltd は、ガンベラ州の土地を、最初の6年は土地賃貸料なしで、残り84年は年間1haあたり15ブル(1.18USD)の賃料で借りる契約である(The Guardian 2010/1/15)。今後3~5年間のあいだに2.5万人を雇用する予定である(Ethiopian Review 2009/6/8)。同社は、エチオピア西部のパコ近郊にも10,900haのトウモロコシ農場を稼働させている(Ethiopian Review 2009/12/31)。

²¹ 日本企業は、エチオピアの土地取得にまだ直接関与していなようである。英文紙 The Japan Times の4月4日付記事には、C.W.ニコル氏による「日本よ、どうかエチオピア人の土地を強奪しないでくれ」と題した記事が掲載され、農場建設が現地に暮らすエチオピア人の生活に悪影響を与える危険が述べられている。これに対して同紙の4月11日付記事には、駐日エチオピア大使による「エチオピアに『土地強奪』はない」と題した反論が掲載され、日本企業らにエチオピア農業セクターへの投資を呼びかけている(The Japan Times 2010/4/4, 2010/4/11)。

²² <http://www.mofa.go.jp/policy/economy/fishery/agriculture/summary0909.pdf>

地取得への反対声明をだしている。²³

では、これらの土地はもともとだれがなんのために利用していた土地だったのだろうか。ここに登場してくるのが、第1節で触れた「未利用地」や「過少利用地」といったことばである。ウェブ上の記事によれば、エチオピア政府は同国内の7.4千万haの耕作可能地のうち6千万haは「過少利用」状態にあると分類しており(L'Hebdo 2009/9/3; The Guardian 2010/1/15)、この土地をより「生産的」に利用するために国内や海外の投資アクターへ貸与していると主張する。実際、政府の投資促進エージェンシー²⁴の書類に記録されたすべての配分地は、それ以前に利用者がなかった「荒地(wastelands)」として分類されている。しかし、配分地のうち少なくともベニシャングル-グムズ州やアフアール州の土地は、焼畑や乾季放牧地に利用されていた土地だという(Ethiopian Review 2009/6/10)。政府は、「土地はそもそも未利用地なのだから、そこから追い出された(displaced)人はいない」という立場をとっている(Ethiopian Review 2009/11/20)²⁵。また同国の農業大臣は、農場用地とされた土地をそれまで放牧地として利用していた牧畜民はどうするのかと問われ、「どこかよそに行くことができるだろう」と答えている(L'Hebdo 2009/9/3)。

サウルオモ県での土地取得

この外部資本による大規模な土地取得の動きは、エチオピアの西南端に位置するダサネッチにも及んでいる。ダサネッチ郡が属するサウスオモ県に関しては、'The Best Investment opportunity in SNNPR South Omo Federal Ministry of Agriculture and Rural Development Ethiopia' と題された書類が存在する。この書類には日付も執筆主体も明記されていないが、現在では Cultural Survival のウェブページ上からダウンロードできる。²⁶

書類の1ページ目には、つぎのように記されている。「調査は、南部州サウスオモ県の4郡でなされた。これにはダサネッチ郡、ニャンガトム郡、ハマル郡、サウスアリ郡が含まれる。基本的に、本調査は州政府によるサーヴェイに依拠してなされた。州の調査チームは、サウスオモ県で投資活動のための305,522haを同定した。その中で、本調査は農業省へ移譲される(transferred)ことになっている180,604haにのみ焦点を当てた」。この文章の下には、表1にそのまま再現した表が掲載されている。ダサネッチ郡では8.9万ha、サウスオモ県全体では約18万haの土地が商業農場向けに分類されていることが分かる。次ページからは各郡の比較的詳細な地図上に農場候補地域がプロットされている。報道によると、エチオピア農業省は168万haの土地が農場向けにあると宣伝しており、ベニシャングル-グムズ州、ガンベラ州、南部州サウスオモ県の土地に関しては「細かいデータベース」があると報じている(The Guardian 2010/1/15)。この書類は「データベース」の一部と推測できる。

²³ Anywaa Survival Organisation(ASO)は、2010年3月11日付で *The Ethiopian Government's Secret Land Grab Deals* としてプレスリリースを発行している。Oromo Studies Association (OSA)は、2010年2月25日付で、*The Land Grab, Eviction of the Oromo People, The 21st New Colonization and Modern Slavery in Oromia* と題した国連事務総長宛ての公開書簡を送っている。

²⁴ 記事には明確に記されていないが、Ethiopian Investment Agency のことだと推測される。

²⁵ 駐日エチオピア大使も、「政府は未利用の土地や政府系企業が保有する土地のみを配分しているので、外国企業の農業投資による農民の追い出し(dislocation)は存在しない」と述べている(The Japan Times 2010/4/11)。

²⁶ <http://assets.survivalinternational.org/documents/194/SouthOmoAgrInvestmentAreas.pdf>

表 1 . 農業省の書類に記された表

Sr	Geographical location	District	Capital town	Area Transferred (ha)	Area verified (Ha) MoARD	Area proposed to lease (ha)
1	Southern part of South Omo zone	Dasenech	Omorate	89,000	76,409	
2	Western part of South Omo zone	Gnangatom	Kangati	63,000	71,473	
3	Central part of South Omo zone	Hammer	Dimeka	15,000	16,292	
4	Northern part of South Omo Zone	South Ari	Gazer	14,017	16,451	
				180,604	180,625	

出所：The Best Investment opportunity in SNNPR South Omo Federal Ministry of Agriculture and Rural Development Ethiopia より

サウスオモ県で実際にどれだけの土地が、すでに商業農場用に取得されているのかも正確には不明であるが、ウェブ上から関連した記事を拾い出しておこう。

- ・南部州のワライタとサウスオモの 2.990ha で、海外・国内投資家がジャトロファやパームオイルを耕作中である(Daily Monitor 2009/7/30)
- ・南部州の農場地は 18 万 ha である。2009 年 9 月 21 日にサウスオモ県の土地を Sara Ind が 1.5 万 ha、国内企業の Daniel agro-industries が 5 千 ha、 Reta agro が 2 千 ha をそれぞれ取得した。いずれも綿花農場になる予定である(Addis Fortune 2009/9/27)
- ・Amibara Agricultural Development Plc が 南部州のノースオモ県に 4.446ha を獲得し、アバヤとサウスオモでは綿花とバナナ農場を開園している(Addis Fortune 2009/10/4)
- ・ダサネッチ郡で 3 万 ha の農場が稼働しており、3 千人の牧畜民に雇用を提供している(The Ethiopian Herald 2010/1/1)

ダサネッチ郡の商業農場

ダサネッチ郡では、2009 年 8 月時点で 2 つの商業農場がすでに事業を開始していた。もっとも、それは上述の書類の地図上で農場候補地とされた地域のものではない。地図上の候補地はオモ川西岸の土地であるが、この地には現在まで農場はつくられていない。聞き取り調査によると、候補地域にほぼ合致すると思われる土地にはイスラエル資本の企業が約 10 万 ha の土地の契約をめくり政府と交渉していたが、最終的に進出を断念したという。

現在すでに稼働しているのは、オモ川東岸にある 2 つの農場である。ひとつは上述の記事でも触れられているように、オモラテの町のすぐ北に広がる 3 万 ha を、2007 年にイタリア企業 FRI-EL Green Power の現地法人が取得した。2009 年 8 月時点での耕作地は 164ha であり、ジャトロファなどを栽培している。記事に書かれている 3 千人の雇用は存在せず、被雇用者数は合計で 150 人程度である。その多くはダサネッチで、1 日 12~15 プルを得ている。この農場は、第 2 節で触れた軍事政権期に建設された綿花農場の跡地を一部利用している。

もうひとつは、オモラテの町から 10km 程度南にくだったところにあるカブシエ村やディ

エレニモル村周辺の農場である。契約面積は1千haと規模は小さいが、それでも地域住民の暮らしにはすでに大きな影響を与えている。以下で焦点を当てるのはこの農場である。

この農場の経営者はゼリフン氏 (Zerihun Ambaye) である。彼は現政権の中核を占めるティグレ人であり、牧畜民の生活向上を目的としたローカル NGO である EPaRDA (Ethiopian Pastoralists Research and Development Association)²⁷ の設立者である。彼はアディスアベバに暮らしており、現地に住み実際に農場を管理しているのは氏の息子と、オモラテ農業省を退職したあとに EPaRDA の職員として働いた経験を持つアムハラ人の男性テリー氏である。

農場への初期投資は450万ブルであり、土地賃料は年間1haあたり47ブルを支払う予定である。農場の契約は2008年8月に完了し、2009年1月から農場の整備が始まった。整備後は、大部分の土地でトウモロコシを生産し、2009年7月に最初の収穫をして、おもにエチオピア中南部の町アルバミンチで1kgあたり5ブル程度で販売した。農場主の息子によれば、トウモロコシはケニア側では8~10ブル程度で売れるので、今後はできるだけケニアで売ることを目指す予定である。2009年8月時点で耕作されていたのは30haである。2010年にはさらに300ha拡張する予定であり、すでに土地の整備は終えている。また農場に加えて、ランチング (牧場経営) をする計画もあり、テリー氏はすでに6頭の牛を所有している。

筆者の滞在中にゼリフン氏が農場を訪問していたため、2009年8月23日にインタビューをおこなった。まず、プロジェクトにあたっては2~3人の国務大臣と話し合ったという。この地域に農場を建設しようと考えたきっかけは、2000年ごろに EPaRDA の仕事で干ばつ中のダサネッチを訪問し、政府から無視されてきた彼らを助ける必要があると感じたことである。氏によれば、政府は近年 NGO に対して抑圧的であるため、自分は間接的に牧畜民のためになることをしようとしている、自分が農業の仕方を教えてダサネッチがみずから農業生産できることを示し、政府が牧畜民を適切に扱うようにさせることが重要である、と述べた。農場は50年契約だが、そのことが政府に示せたらコミュニティに土地を譲るつもりであるという。現在、オモ川西岸にも1千haの灌漑農地を作る予定が進行中である。ギベ第3ダムと農場建設との関係について質問したところ、ダム建設はエチオピアの経済成長にとって重要な事業だが、自身の農場はダム建設とはいかなる関係ももたないとの答えであった。²⁸

第1節で触れたように、エチオピアでは現政権下で、憲法上では牧畜民の土地権利が保障され、市民社会においても牧畜民の権利向上の動きが広がりつつあるが、実際には農耕化をとおした定住化によって牧畜地域の周縁化をますます強める政策が継続している。この矛盾を体現しているのが、「牧畜民の権利を守るべく」活動しているはずのローカル NGO の代表が、牧畜民の利用してきた土地を取得して農場を経営している本論の事例である。

農場を実質的に管理している氏の息子に対しても、複数回のインタビューをおこなった。彼は、「われわれはこの地で最初の投資家である。ダサネッチは世界でもっともイノセントで、

²⁷ EPaRDA は、エチオピア国内の牧畜地域の開発を促進することを目的として1999年に設立された。本部はアディスアベバにある。2001年からは、サウスオモ県で家畜のヘルスケアや民族間の紛争緩和のための活動などを進めてきた。

²⁸ 2つの事業がたがいに無関係に進行しているとは考えにくい。ゼリフン氏の農場が作られた土地は、大規模な洪水が発生した場合に氾濫水が及び、灌漑農業に致命的な被害を与える可能性がある。ギベ第3ダムの建設により洪水が「適切に管理」されることで、このリスクは大幅に軽減される。オモ川上流部でのダム建設と下流部での農場建設が、セットになっておこなわれた可能性もありうる。

家畜と土地のことしか知らない。ここに電気、学校、病院をつくり発展させたい」と述べていた。

5. 農場と近隣住民との関係

本節では、2009年8~9月時点で農場と近隣村に暮らすダサネッチがいかなる関係を築いていたのかをみていこう。ゼリフン氏の息子やテリー氏、数名の技術職者は、農場から数百メートル離れた木陰付近に、8張のキャンプを張って暮らしている。本稿ではこれを「キャンプ」と呼ぶ。キャンプの隣にはその見張りなどをおこなうダサネッチらが暮らす村がある。筆者は、この村に16日間暮らしてダサネッチと高地人とのやりとりを観察した。

建設予定地からの退去

図2は農場の概略図である。オモ川沿いにポンプを設置して、そこから水路をとおして商業農場に水を送る。すでに稼働している農場の南側には整備済みの土地が広がっている。また水路の脇には、後述するダサネッチに配分された灌漑農地も広がっている。

農場が作られた土地はもともとどのように利用されていたのだろうか。筆者は、2006年2~9月の現地調査時に、農場が建設された土地周辺に暮らしていた。その当時は、現在農場となっている土地に家屋は少なく、おもに放牧地や氾濫後の農地として利用されていた。家屋は農場脇の車の通り道の西側、つまりオモ川に近い側に集中していた。もっとも、当時から数十件の家があった。2009年の調査時には、実際の立ち退きが起きた2009年初めごろに農場となった土地に暮らしていた人びとに話を聞くことができた。彼らの大部分は、退去勧告にしたがって家を農場予定地の周辺に移動させた。立ち退きの見返りはなににも与えられなかった。現行憲法で謳われている、「みずからの土地から追い出されない」牧畜民の権利は無視されたのである。立ち退き勧告に応じず車で土地が整地された時まで住居を構え続けた人もいたが、ほかのダサネッチが移住して「コーヒーをとともに飲む相手もいなくなってしまった」ため、最終的には農場脇に退去した。

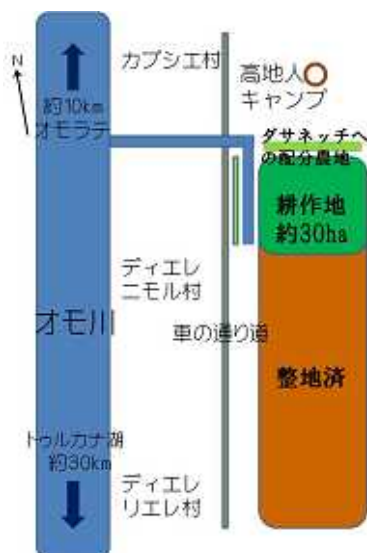


図2. 農場周辺の概略図

農場関連労働への雇用

農場建設にともなう土地損失を補う地域住民の受益として、政府や企業がしばしば挙げるのが「雇用の創出」と「新技術の導入」である。以下では、この2つについてみていこう。

まず、農場の被雇用者について概説する。技術職が中心となる常勤職は6名である。これらの人物の帰属民族は、アムハラ人が2人、ガモ人、ゴファ人、グラゲ人、ワライタ人が各1人である。月給は1400ブル程度である。また、エチオピアの中南部出身のワライタ人やガモ人など25名前後が、季節労働者として農場近くのカブシエ村に滞在している。日給は15ブルである。以上は、いずれもダサネッチにとって「ウシュンバ」である。

これに加えて、25名前後のダサネッチが働いている。農場労働に従事しているダサネッチの大多数は、農場の近隣村、つまりディエレニモル村とカブシエ村に住む20～40代男性である。彼らが従事している仕事は5つある。農場監視人は、昼夜に農場脇で農場に泥棒や家畜が侵入しないように見張る。鳥追い人は、朝から夕方まで、結実したトウモロコシを食べにくる鳥を追い払う。家畜放牧者は、テリー氏の家畜を毎日放牧する。キャンプ夜警は、キャンプに夜泊まり込み不審者が入ってこないように見張る。機械夜警は、オモ川沿いに置かれたポンプなどを泊まり込みで監視する。調査時には、それぞれの仕事に13人、7人、1人、3人、3人前後が雇用されていた²⁹。月給は職種により異なり、200～450ブル程度である。

では人びとは給料をなにに使っているのだろうか。給料日前に質問したところ、多くのダサネッチが「小家畜を買い、それを元手に家畜を増やす」と答えた。去勢小家畜は1頭200ブル前後で取引されている。8月25日は農場監視人への給料日であったため、30代の未婚者に翌日尋ねたところ、200ブルの給料は10ブルしか残っていなかった。多くは、給料日前から抱えていた酒の負債に支払われており、残ったカネも酒の購入に費やしていた。40代の妻子持ちの農場監視人は、8月29日時点で給料170ブルは使いつくされていた。ほとんどは、主食であるモロコシや毎日飲むコーヒーの購入に使われていた。炎天下の仕事で疲れたあとや、寒くて話し相手のない夜の見張りに酒は必須であるし、この時期は穀物も不足しがちであった。そのため家畜を買うことは難しく、給料は当座の用事に使われてしまっていた。

また、ダサネッチの間で農場の仕事に対する不満は多く、一度仕事に就いても数カ月で辞める男性が多い。不満の内容をまとめれば、高地人のダサネッチに対する高圧的態度、高地人のけちさ、そして農場での仕事がダサネッチ同士の軋轢を招くこと、の3点である。一つだけ農場監視人による語りをあげておこう。

語り(2009/8/21、40代男)

のどが渴いているが、高地人はなにもくれない、(他人の)土地に来たら、なにかをあげてたがいに知りあう。訪問してきたら家に招いてコーヒーを飲む。高地人はそれをしない。ただ私だけがのどが渴く。ただ座って監視している。これはよくない。

灌漑農地の取得

二つ目の「受益」は新技術の導入である。本論の文脈では新技術とは灌漑技術のことであ

²⁹ これに加えて、2009年8月30日から11人の女性が、収穫したトウモロコシの選別作業に雇われることになった。彼女たちの日給は15ブルである。

る。ダサネッチでは、キリスト教系組織が灌漑設備を整備したごく一部の地域を除けば、氾濫原農耕と天水農耕しかおこなわれてこなかった。商業農場の建設にともない、オモ川沿いにポンプが置かれて水路が整備され、高地人が水路脇の土地をダサネッチへ配分したことで、新たに灌漑農業が可能になった。筆者が同定できたかぎりでは、土地を配分された世帯は 22 世帯であった。配分面積は一世帯あたり数メートル四方の土地である。

ここでは、トマトやタマネギなどが生産されている。収穫物は自家消費される場合もあるが、多くは高地人キャンプや町で高地人に対して、また村でほかのダサネッチに対して販売される。筆者の滞在中はちょうど収穫期にあたり、筆者が世話になっていた世帯では、16 日間に 3 回の販売をおこない合計 29 プルを得ていた。

もっとも、生産に熱心なのは 3~4 世帯のみであり、農地を配分された多くの世帯は、栽培中に家畜に食べられてしまったり、収穫前に盗まれたり、灌漑の水がなくて枯れてしまったために、ほとんど収穫ができなかったという。とくに最後の理由は、農場との関係から発生する問題である。ポンプの稼働日は農場側が決定し、ダサネッチはその稼働日を事前に知らされていない。そのため、播種後も水が来ない日が続けば作物は枯れてしまう。

また、配分された農地はわずかであるし、望んでも農地の配分を受けられなかった人もおり、配分を受けた人、受けなかった人双方に不満が残った格好になっている。そのため多くのダサネッチから、以下のようなことばが語られることになる。

語り(2009/8/20、20 代女)

高地人はだました。最初「ともに耕作しよう」といったのに少ししかくれない。そのことを抗議すると、「土地は車で耕した。土地が必要なら車とガソリンの金を払え」という。

現在までのところ、わずかな雇用創出や灌漑農地の配分が、土地を失ったことのはく奪感を埋め合わせているとはいいいがたい状態である。

インフォーマルなやりとり

農場労働と土地の配分以外にも、キャンプの高地人とダサネッチの間にはよりインフォーマルな関わりがある。代表的な関わりとしてモノのやりとりがある。ダサネッチがキャンプに持ち込むモノとしては、家畜や魚、バターなどの食糧や、材木がある。キャンプの高地人はこれらのモノに対して現金を支払う。彼らはまた、筆者が暮らしていた村の人びとに無償でモノを譲っていた。たとえば、ペットボトルや古くなった T シャツなど高地人が不要になったモノや、高地人が家畜を殺した際にはその皮や内臓を与えていた。

この側面だけをみると、両者間には互恵的な関係が築かれているといえそうであるが、実際には小さなトラブルがよく発生していた。一つだけ事例をあげよう。

事例(2009/8/22)

キャンプに入った村人の小家畜を高地人がたたき、家畜の音が響く。各家のなかで休んでいたダサネッチたちが「家畜が殺される」と言いながら一斉に飛び出す。キャンプと村の間にある柵の前で「どうしてそんなに強く打つのか、もともとわれわれがここに家畜を放牧して

いたではないか」とダサネッチ語で叫ぶ。

これまで町にいただけだった高地人、そしてダサネッチに高圧的にふるまう高地人がすぐ隣に移住してきたことで、従来の日常生活では経験することのなかった緊張を村人は絶えず強いられている。

農場をめぐるトラブル

上に記したのはキャンプと隣村のトラブルであるが、筆者の滞在中には農場全体をまきこんだより大きなトラブルも発生した。以下では2つの事例をあげよう。

事例：トウモロコシ泥棒をめぐる

農場へのトウモロコシ泥棒は筆者の滞在中に二回発生した。夜中に農場監視人の目をかいくぐって収穫前のトウモロコシを盗み、町などで売却することが目的である。泥棒が発生したことは、朝になって農場内に監視人が入ったときに判明する。すると農場監視人らは、泥棒のものと思われる足跡をたどり、その行き先を同定しようとする。8月19日に判明した盗みの犯人はみつからなかったが、8月30日に発生した盗みの犯人はみつかった。彼は、農場から2km程度離れた村に暮らすダサネッチであった。彼はオモラテの警察に送られていった。

事例：トウモロコシの葉と茎の配分をめぐる

トラブルのきっかけは、8月18日の朝に農場で仕事をするダサネッチが、ほかのダサネッチに「収穫後に残ったトウモロコシの茎と葉はわれわれが使っていい、と高地人が言っていた」と伝えたことである。そのため、約20人のダサネッチが各自の家畜を農地に連れてきて、茎や葉を食べさせていた。ダサネッチはもともと自分たちのモロコシ畑で比較的自由に刈後放牧をおこなってきた。まもなくすると、高地人が来て「すぐ家畜を連れ帰れ」と命令した。高地人は、「葉や茎はキャンプの倉庫に運んで自分たちが飼う家畜にだけ食べさせる」と主張した。ダサネッチはしぶしぶ家畜を連れ帰ったが、「雨が降らず牧草も生えず家畜はやせ細っている。なぜ高地人は拒絶するのか」と、高地人のけちさへの不平を繰り返して述べていた。

農場側の対応

このようなトラブルが発生すると、キャンプの高地人は農場に関わりをもつダサネッチを集めてすぐに会合を開く。筆者が滞在中の16日間にも6回の会合が開かれ、一回2~3時間話が続いた。その場では、「働いているところはいつも監視されている」、「政府や年長者はこのことをすべて知っている」、「おまえたちの給料はない」といったことばを並べ立てて、自分たちが上位の立場にあり、すべての決定権を握っているかのように話す。³⁰

しかし、この「上からの」命令だけではトラブルを防いだり解決できない。高地人はこの地では圧倒的少数者である。ゼリフン氏らはオモラテの町の郡政府とは協力関係を築いているが、それだけでは不満を有する近隣村のダサネッチとの日常的関係を非敵対的に保つこと

³⁰ 農場主やその息子らは、ダサネッチとの会合ではアムハラ語で話し、アムハラ語を知るダサネッチが通訳してほかのダサネッチに伝える。

はできない。農場主の息子は、筆者に対して「われわれはダサネッチを恐れている」と述べていたが、これは少数者としての彼らの心情を吐露したものであろう。それに加えて、農場を適切に運営していくために必要なこと、たとえば泥棒を取り締まり、トウモロコシの茎や葉をきちんと管理するためには、近隣村のダサネッチの協力が不可欠である。

そこで、トラブルを避けるために農場側はいくつかの対処案を採用している。一点目としては、「伝統的権威」たる年長者と協力関係を築こうとしていることであるが、これは次節でくわしく述べる。二点目は、3名程度の近隣村に暮らすダサネッチが、高地人とダサネッチの間を取り持ちトラブルの深刻化を防いでいることである。彼らはいずれも、カベレと呼ばれる村レベルの最小行政単位の役職に就くダサネッチである。もっとも、彼らは村に暮らしてほかのダサネッチ同様に牧畜と農耕に依存した生活を送っており、キャンプの高地人が用いるアムハラ語を話すこともできない。両者間にトラブルが起きやすいのは、つぎの例が示すように金銭を介して物資のやりとりをする際であるが、この時に彼らが仲介役となる。

事例(2009/8/23)

キャンプで、高地人3人とダサネッチの青年が4缶のバターを前に立っている。高地人が「1缶20ブルで4缶とも買う」と述べ、1缶を鍋に入れるとまだ水気が多い。そこで「15ブルだ」と言うと、青年は拒絶して「20ブルだ」という。高地人は「いらぬから持って帰れ」と述べる。青年は、「一度鍋に入れたのだから、元に戻すことはできない」と拒絶する。こう着状態に陥っていたところにカベレの役職に就くダサネッチが来て、青年をなだめながら15ブルを受け取らせ、残りの3缶は持ち帰らせる。

キャンプの高地人はダサネッチ語を片言しか知らず、この役職者もアムハラ語を知らない。しかし村の行政職に就いたダサネッチは、すでに町などで高地人との交渉などに慣れているため、その場の状況を推測して、それ以上大きなトラブルにならないよう事を穏便にすませているのである。

三点目は、高地人がダサネッチの「話を聞く姿勢」はみせることである。トラブルの発生後にダサネッチを集めた会合時には、必ずダサネッチに対して意見を聞き、話が長くても最後まで話させていた。8月25日の会合では、あまりに冗長に話をしているとして、通訳が男性の話を途中でやめさせようとしたが、農場主の息子はこの通訳を叱り、話者に話を続けるよう促していた。四点目は、「アメ」を与えることである。農場主の息子によると、政府との契約でトウモロコシの茎と葉は農場側の所有物であることがすでに取りきめられていたという。しかし8月20日にはわずかながら茎と葉を分配し、ダサネッチの不満を鎮めようとした。

これらの対処により、2009年の調査時点までに暴力をともなったトラブルは生じていない。しかし、高地人のダサネッチに対する蔑視に基づいた発言やふるまいは、ダサネッチにつよい反感を生み出している。それらの発言は、両者の対面時に頻出する。たとえば、会合の休憩時間に「おまえの妹とともに寝るからここに連れてこい」と述べたり(2009/8/21)、材木を売りに来た女性に対して「おまえは私の妻になる気があるか、ないなら材木はいらぬ」と(2009/8/24)と言ったり、「給料を支払うから来るように」という伝言を聞いたダサネッチがキャンプに行くと「なにしにきた、給料はない」と話しかけたりする(2009/8/25)。

第1節で述べたように、エチオピアでは高地地域出身者の多くが低地の牧畜民を蔑視している。そのような高地人にとって、上記の発言は「ちょっとした冗談」のつもりであろう。たしかに、ダサネッチもその場で笑って済ませていることがある。しかしダサネッチ同士の会話では、これらの発言に対する評判はきわめて悪い。一度仕事に就いても、すぐにやめるダサネッチの数は多いが、彼らの多くが仕事をやめた一因として言及するのが「高地人はふざけてばかりにしたことば(*korkor*)ばかり」(2009/9/1、30代男性)だという点である。これらの成員には、高地人と農場への反感だけが残ることになる。

もう一点挙げるべき問題は、上述した「伝統的権威」たる年長者に対する反発がほかのダサネッチの間で強まっていることである。これについては、節を改めて論じたい。

6. 農場建設にともなう社会関係の変化

世代 - 年齢組織

まず「伝統的権威」とはだれかについて明らかにするために、ダサネッチの基本的な社会構造を説明しておく必要がある。彼らの日常生活や儀礼の際にもっとも頻繁に参照される社会組織は世代 - 年齢組織である。世代組織とは系譜上の世代原理(祖父母 - 父母 - 息子娘)に基づいて形成される組織、年齢組織は生物学的年齢に基づいて形成される組織である。³¹

ダサネッチのすべての男性は世代組(*haari*)に帰属する。男性が帰属する世代組は、父の帰属する世代組によって決定される。つまり、父がAという世代組に属していると息子はBという世代組に属し、さらにその息子はAの世代組に属する。各世代組は、8つほどの年齢組(*shad*)によって構成される。世代組への加入は、頭髪を泥(*shad*)で固めてその上にダチョウの羽を立てる整髪儀礼によってなされるが、年齢組とはこの儀礼をともにおこなった成員の集まりである。加入儀礼をおこなう間隔は定まっていないが、平均すると6~7年に一度新たな年齢組が結成されているようである。

世代 - 年齢組織は、大まかな共住単位かつ儀礼の共催単位である地域集団(*en*)ごとに存在する。ダサネッチには8つの地域集団がある。農場周辺に暮らしているのは、おもに最大の地域集団であるインカペロの成員である。インカペロとともに暮らしているより小規模な地域集団の成員のなかにも、農場労働に従事したり農場の配分を受けた人がある。しかし、彼らは農場との関係において周辺的な位置にあるため、以下ではインカペロの成員を対象をしばって話を進める。

現在、農場周辺に暮らすインカペロで最年長の世代組はニモル、その息子の世代はニゴロモギン、さらに息子の世代がヘレニゴロモギンという世代組に属している。最年長のニモルは、もっとも強力な儀礼的力を持ち、それを背景とした強い政治的権威を有する。その下のニゴロモギンは、ニモルに次ぐ力をもつとともに、カベレつまり村レベルの行政職を務めて税金を払うなど、郡政府と強い関わりをもっている。最年少のヘレニゴロモギンは、世代組織内では力をもたないが、学校教育を受けた数名の成員は郡政府で要職を占めている。

³¹ 紙幅の都合上、ここではもっとも基本的な組織の概要だけを記述している。より詳しくは佐川(2009)を参照。

各世代組の農場への対応

農場の建設への対応は、3つの世代組ごとに分かれた。その直接のきっかけは農場整備が始まる直前の2009年1月ごろに開かれた会合だったとされる。これは、ディエレニモル村付近にあるマンゴーの木の木陰で開催された。この場では、ゼリフン氏が提供したウシ1頭と小家畜2頭を殺してその肉を共食し、また多くの酒がふるまわれた。そして、ダサネッチの伝統的会合(*diimi*)の形式を取り入れた演説会が開かれ、つぎのような議論がなされたという。

カベレの行政長(ニゴロモギン):「この土地に、農場をつくるのはいいことだ」

郡政府の役職者(ヘレニゴロモギン):「トウモロコシを播種しよう、トマトを播種しよう。

トウガラシを売ろう。そうやって生活していこう」

ニゴロモギンの成員:「家畜はどこで水を飲めばいいのか、雨が降ったらどこに放牧するのか」

ニモルの成員「このニゴロモギンはうそをいっている。雨を降ればニエキーキヤイヌマ(地名)

にいけばいい、この土地にはもともと少ししかウシがない」

最後にニモルが中心になって「土地に平安を、土地に十分に作物が実るように」と祝福をして、会合は終了した。

最年長のニモルの中心人物は3名で、彼らは強力な呪術的力を有し、サンクションとしてほかの成員に祝福と呪詛をおこなう。農場側がみずからの協力者と位置づける「年長者(*karo*)」とは、彼らニモルのことである。そのことを明白に示していたのは、農場主ゼリフン氏が農場への泥棒に関してニモルと話している時、「大きな人びと(*gaal gudo*)が問題を理解すると、ほかの人はふざけたことやうそをいわなくなる。私がこの地で話す人はあなた方だ。兄弟、友人であるあなた方だ」(2009/8/24)と語っていたことである。また農場主の息子も、農場労働者に対してきちんと働くよう述べながら、「私が言っていることは、この地の年長者ニモルがすべて知っている」(2009/8/25)と述べていた。農場側は「伝統的権威」を尊重しその権威を用いることで、近隣のダサネッチ全体の管理を試みているのである。

ニモルも農場の「協力者」としてふるまうことで見返りを得ている。もっとも、彼らはすでに年長のため農場で働くことはないし、農地の配分も受けていない。ここでいう見返りとは金品の享受である。とくにゼリフン氏の農場訪問中には、ニモルは毎朝キャンプの前に座り、食事やコーヒーも取らず氏から声がかかるまで待ち続ける。ニモルは、ゼリフン氏が滞在した4日のうち2日キャンプに迎え入れられ、その場で農場が抱える問題に関する意見交換会が開かれた後に、8月22日は3名がそれぞれ50ブルとマットレス1枚を、8月24日は4名がそれぞれ10ブルと葉巻1本を受け取っていた。

これに対して最年少のヘレニゴロモギンの大部分は、農場建設に反対の姿勢をとっており、ほとんどの成員が農場と直接に接触を持っていない。マンゴーの木陰での会合にも出席を拒否した成員が大部分である。農場建設開始後には、その多くが農場付近を離れて南の家畜キャンプへ移動していったため、現時点で農場周辺に暮らす成員はわずかである。彼らの反対の原因は、つぎの語りが示すようにおもに二つある。一つは農場建設により自分たちが放牧地や農地として利用している土地が失われること、二つはその決定をニモルらが自分たちに相談せずに勝手に決めたことである。

語り(2009/8/27、30代男、ヘレニゴロモギン)

ヘレニゴロモギンは、会合を拒否して一人もその場に座ることはなかった。もしそうしようとする者がいたら、彼の年齢組仲間が彼を打つただろう。ヘレニゴロモギンは「この土地は家畜の土地だ、土地がなくなったら家畜はどこで草を食べるのだ」と言った。

語り(2009/8/20、20代女、ヘレニゴロモギンの妻)

ニモルはどこにも行かずモロコシを食べているだけだ。だから高地人の話を受け入れた。しかし他の人びとは家畜を放牧し、土地に播種するから反対する。

もっとも、ここで触れておく必要があるのは、すべてのヘレニゴロモギンが農場との関係を断っているわけではないことである。たとえば、農場で雇用されている男性が1人いたし、農地配分を受けた男性も4人いた。また郡政府の閣僚の1人はヘレニゴロモギンに帰属するにも関わらずマンゴーの木陰での会合に出席しており、そこで農場の受け入れを促す演説もおこなった。農場への反対を明確にしている30代男性に、これらの成員についてどう考えるかを聞いたところ、つぎのような答えであった。

語り(2009/9/1、30代男、ヘレニゴロモギン)

われわれのなかにも高地人の土地を得たものがあるが、それは彼らの胃が決めたことだ。欲しい人はそれを得るし、望まないものは望まない

ここで用いられている「胃」とは、ダサネッチにとっての個人性を表す語で、当人の性格や感情、真意などを表現する多くの慣用句に使われる。ダサネッチの間には、他者の「胃が決めた」ことは最終的に受け入れるべきであるという共通理解が存在する(佐川 2009)。この共通理解は、現在までのところ農場建設への対応にも適用されている。また、ヘレニゴロモギンのなかでも年長に位置し影響力も強い男性の妻は、筆者が滞在中に2度キャンプへ材木を売りに来ていた。夫が農場に反対しているからといって、妻が農場との関係を断っているわけではないのである。このように「胃がちがう」成員の決定を受け入れる余地は残しているものの、ヘレニゴロモギンのほとんどは農場への反対の意思を示している。

ニモルとヘレニゴロモギンの中間の立場にあり、成員内の対応が分裂したのはニゴロモギンである。彼らは、マンゴーの木陰での会合に出席した者と出席しなかった者に分かれ、さらに会合でニモルらの姿勢に反発した出席者もいる。農場建設後も、ヘレニゴロモギンと同じように農場と関わりを断っている成員も多い。その一方で、農場労働者としてまた農地の配分を受けた者として、高地人ともっとも密接に関係しているのもこの世代組の成員である。農場労働者の61%(n=23)、農地被配分者(n=22)の82%はニゴロモギンの成員である。ただし、農場雇用と農地配分を受けた人びとも農場に対しては両義的な態度を表明している。たとえば、キャンプの夜警をしている男性はつぎのように語った。

語り(2009/8/20、50代男、ニゴロモギン)

ニモルが土地を与えると決めた。彼らはわれわれの父親だから、決めたことに従うしかない。ヘレニゴロモギンはこれを拒否した。この土地は家畜を放牧し草を食べる場所である、と。...私の胃はヘレニゴロモギンと同じだが、父親が決めたから従う。自分は給料をもらい小家畜を買う。これはダサネッチの嫉妬を呼ぶが、監視人も鳥追いの数も十分ではない。高地人が決めたことだからしょうがない。

このように、農場と関係をもつニゴロモギンは「政府関係者と高地人が決めたからしょうがない」ということばを繰り返し語る。ダサネッチ内ではニゴロモギンに次ぐ2番手、行政的には町の政府との関わりが強いいため、彼らは高地人ともっとも頻繁に接触し、ほかのダサネッチから嫉妬を買う役回りを引き受けざるを得ないのである。

つぎに、この世代組ごとの農場への分裂した対応が、彼らの社会関係にもたらしつつある2つの変化を紹介しよう。それは、土地の所有単位をめぐる話法の変化とニモルの権威低下の兆しである。

土地の所有単位をめぐる話法の変化

上述したように、現在農場になっている土地は2006年の調査時には家屋があまりなく、おもに放牧地として利用されていた。当時、筆者が聞き取りをしたなかでは、この土地は「家畜の土地」や「トゥールニエリムの土地」という表現がなされることが多かった。トゥールニエリムとは、父系クラン(tuur)の一つである。

1960年代後半にダサネッチで調査をおこなったアルマゴールは、土地の所有単位が土地の種類により異なると述べている。毎年、川の増水時に必ず水が及ぶため確実に農耕ができる川岸傾斜地は、所有権がクラン単位で設定されている。原理的にそのクランの成員ならだれでも利用が可能である。それに対して、氾濫原など洪水の水が来るかどうか不確実な土地は「カミの土地」と呼ばれ、明確な所有権が設定されていない(Almagor 1978: 43-45)。筆者の調査もほぼこれに一致するが、後者の土地は「家畜の土地」として言及されることの方が多かった。これらの土地は、理念的には「だれでも自分の家畜を自由に放牧できる土地」だとされる。ただし実際には、これらの土地もその周辺を最初に利用を始めた人が優先的に利用する権利を有しており、土地の所有単位としてはその人が属する父系クランに言及されることが多かった。農場となった土地は、トゥールニエリム・クランの成員が最初に耕作を始めたため、「トゥールニエリムの土地」と言及されていたのである。

しかし、2009年8月に聞き取りをしていると、農場になったのは「ニモルの土地」という説明がされることが一番多かった。聞き取りをさらに進めていくと、この「ニモルの土地」という表現は「ニモルが祝福した土地」という含意を有していることがわかってきた。ダサネッチでは、カミの豊かさを地上にもたらず上でニモルの祝福が不可欠である。上述したように、ニモルは2009年1月の会合で農場となる土地を祝福した。現在の農場地は、その祝福を受けた土地であるという意味で「ニモルの土地」と呼ばれているのである。

農場となった土地を「ニモルの土地」と言及する点において、対立関係にあるニモルとヘレニゴロモギンは共通している。ただし農場が「ニモルの土地」と言及される文脈は話者に

より異なる。まずニモルの最年長者は、ゼリフン氏との会合の際に農場を「われわれが祝福した土地」として言及していた。このように言及することで、彼らは農場に対する自分たちの貢献を高地人に想起させ、見返りを与えるよう求めているのである。それに対してヘレニゴロモギンの若者は、筆者との会話のなかのつぎのような文脈で触れる。

語り(2009/8/27、30代男、ヘレニゴロモギン)

ニモルがカミを呼んで「ディエレニモル村に安寧を、食糧をまけ、トウモロコシをまけ、実が実るだろう」と祝福した。それがこの土地だ、このトウモロコシだ。それより南はヘレニゴロモギンの土地だ。南にまで高地人が来たら戦争(*osu*)だ。

つまり彼らは、農場とされた土地は「ニモルの土地」、されていない土地は「ヘレニゴロモギンの土地」と定位することで、これ以上の農場の拡大阻止を正当化しようとしているのである。このように、農場にまつわる各アクターの異なる思惑が「ニモルの土地」ということばに含意されながら、レトリック上での土地所有単位がクランから世代組に変化しつつある。これが現実の土地利用に反映してくのか否かは、今後細かに観察していく必要がある。

ニモルの権威低下

もう一点、顕著な変化として挙げられるのがニモルの権威低下の徴候である。そのことを如実に示していたのは、若者男性や子供がネガティブな含意を込めながら「ニモルを真似する」つぎのような場面である。

事例(2009/8/27)

農場近くの木陰で1人のニゴロモギンと3人のヘレニゴロモギンが「高地人との会合では酒が提供された。ニモルは酔っ払いながら神を呼んだのだ」といって、一人が「酔っ払いながら神を呼ぶニモル」を、甲高い声をだしながら真似して、みなで大笑いする。

事例(2009/9/1)

キャンプの隣村に住む2人の少年が、キャンプ前に座ったままの4人のニモルを見ながら話す。「ニモルは悪い。満足しない人たちだ。木陰で太陽が沈むまで座って、お父さん、と声をかけられるのを待っているばかりだ」といってそのだらけた姿を真似し、笑う。

ニモルはダサネッチでもっとも強い祝福と呪詛の力を有しており、このように「ニモルを馬鹿にした話」をしていたことが彼らに伝わると、その呪詛の対象とされてもおかしくない。しかし、人びとはあからさまにニモルをあざけりの対象にし始めていた。

この変化はつぎのように考えることができる。世代・年齢組織でその最高位に位置するニモルは、本来は「ダサネッチのやり方(*nyatal*)」の頂点に立ち、ほかの人びとにそれを指導すべき存在だった。しかしそのニモルが、カネに懐柔されて高地人との結びつきを自分たちだけで可視的に強めた結果、ほかの成員からあざけりや嫌悪の対象になっている。「可視的」とは、彼らが毎日キャンプの前に座ったり、高地人からカネをもらって村で酒を飲んだりする

といったように、ニモルが高地人と密接な関係を築いている姿をほかの成員が実際に確認することができる、という意味である。それは、たとえばつぎのような場面である。

事例(2009/8/21)

朝方、キャンプの柵の外側に3人のニモルが座っている。それを見て村の二人の女性は「王（ゼリフン氏のこと）がきたので、カネをねだりにやってきたのだろう」と話し合う。50代女性（ニゴロモギンの妻）は「カネ、カネ、カネばかり」と吐き捨てて家に帰っていく。

ニモルが「カネを食べた」ことは、農場に関する質問をしたときに近隣住民のほぼすべてが言及する。彼らはさまざまな場面で、その様子を実際に目にしているのである。また、農場から遠く離れた地域に暮らすダサネッチは、農場のくわしいことに関してはほとんどなにも知らないが、「ニモルがカネを食べた」ことだけは伝え聞いている。

ハンゲマンとムルゲータは、外部アクターがエチオピア南部の牧畜集団間の和平会合を進める際、男性年長者ばかりをコミュニティの代表として選出し、それに対して他の成員が反発を強めつつあることを指摘している(Hangman & Mulugeta 2008)。本論の事例では、農場側は最小限の負担でダサネッチの管理を進めるために地域の「伝統的権威」を重用しているわけだが、それがむしろ人びとのニモルへの反発を強めその影響力を中長期的に弱める結果を招きつつあると考えることができる。

もっとも本論で挙げたのは、少人数での会話時のあざけりのことばである。今後は、ニモルも含めた成人男性が数十名参加して開かれる演説会などの「公的な」場で、農場をめぐるいかなる議論がなされるのかにも注目していく必要がある。

7. 農場建設にともなう自己認識の転換

ここまで、農場建設にともない高地人と近隣のダサネッチがいかなるやりとりを重ねているのか、農場建設がダサネッチ内部でいかなる対応の違いを生み出しているのか、の2点をみてきた。最後に、農場建設がダサネッチの自己認識に与えつつある影響に触れておきたい。なぜなら、筆者は聞き取り調査を進める過程で、ダサネッチの自己認識が大きな転換点にあると考えられるような二つの発言を繰り返し耳にしたからである。

「愚かな人びと」としてのわれわれ

その発言のひとつは、「ダサネッチは愚か（あるいは無知）だからそのことを知らない。知っているのは高地人だけだ」という発言である。これは、筆者が農場に関するややくわしい事情を聞き取っていた際に頻出したことばである。ここで「愚か、無知」と訳した *deech* という語の対義語は *inyasich* である。*inyasich* とは、「みずからの経験によって得た知識を自己の行為選択や他者への助言に適切に反映させることができる」ことを意味する。*deech* とはそれができない人である。つまり、上記の発言には「知識も経験もないため高地人に土地を奪われてしまい、いまでも農場についてなにも知らないダサネッチ」という含意を見て取ることができる。この「ダサネッチは愚かだ」という表現は、高地人が会合の際に使う言葉で

ある。二つの例を挙げておこう。

事例(2009/8/25、給料支払い時の会合)

農場主の息子が「おまえたちは盗みについてどう思うのか」と尋ね、出席していた各ダサネッチに答えさせたあと、「おまえたちは愚かだ。おれがひとついおう」と話したす

事例(2009/8/27、カベレの会合)

人びとが農場のテリー氏のふるまいに不満を述べ続けることに対して、郡政府の要職に就くダサネッチが、「ダサネッチは愚かだ。なにか問題をみつけるとすぐ騒ぐ」といって諭す。

後者の事例は、政府要職に就くダサネッチによる発言だが、村に住むダサネッチは町に暮らすダサネッチのことも「ウシュンバ」と呼ぶ。ダサネッチはこれらの高地人による表現をそのまま自分たちの語用法に取り入れることで、「われわれは愚かな人びと」であるという点から、高地人に対する自分たちの立場を位置づけつつあるのである。

さらに指摘しておくべきは、ダサネッチは自分たちが「愚か」であることに対して、次第にいらだちを感じていることである。税金の支払いが議題であったカベレの会合の場における50代男性によるつぎの発言は、そのことをよく示している。

事例(2009/8/27)

今回、私は税金を払わない。嫉妬(*inaf*)が私に入りこんでいるのだ。税金はこう払え、こう払え、こう払え、といわれるだけで、自分たちはなにももらっていない。「ウシュンバがそう言っている」と(郡政府のダサネッチは)いう。われわれはウシュンバではないのか!

ここでは、「ウシュンバ」の意味内容が従来のそれとは大きく変化していることに注目しなければならない。これまで「ウシュンバ」とは、外部からダサネッチの土地にやって来て、ダサネッチの資源を収奪したあとすぐに去っていき、またしばらくするとやってくる「われわれ」とは別世界の存在であった。これを、本論では「高地人」と訳してきたのである。しかし上の事例においては、「ウシュンバ」とは「われわれダサネッチ」もその一員である集団範疇である。ここであえて「ウシュンバ」を翻訳するとすれば、「エチオピア国民」という語が適切だろう。さらに重要なことに、ここでは自分たちは「ウシュンバ」の一員であるが、「愚かな」自分たちはその中のはじっこにしかないという認識も示されている。だからこそ、税金は払う一方で自分たちはなんの見返りも得られないのである。また、この日の会議では税金の話の前に、農場建設に関する話し合いがなされてダサネッチが農場に対する不満を述べていたことも考えれば、自分たちは「愚か」であるから「われわれの土地」も知らぬ間に奪われてしまったという思いも、上の発言からは見て取れる。

この「愚かな人びと」という表現の頻出は、「世界の中心」から「国家の周縁」への自己認識の変化の過程に位置づけることができよう。牧畜民は自分たちが「世界の中心」にいると考えている、とは近年までしばしば牧畜民研究者によって語られてきたことばである。牧畜民は、みずからが採用している家畜中心の生活や価値観をもっとも理想的なものとして捉え、そ

の要素が欠落した他の人びとの生活を自分たちに比べて「貧しい」あるいは「劣った」ものとみなす傾向がある、というのがその趣旨である。

しかしその牧畜民たちも、近年の社会変化にともない国家に代表されるより広い外部世界の存在を知ること、自分たちはその世界の一部分、そのなかでも政治的・経済的に力を有さない少数派集団であることを認識し始めていること、つまり周縁性の自己認識化が進展していることが報告されている。たとえば、ダサネッチの北約 100km 程度に位置するムルシで長年調査をしているタートンは、観光客の訪問や自然公園の設置などにもなって、ムルシの間にこのような意識変化が起きつつあることを指摘している(Turton 2003: 18-19)。

21 世紀の初め、とくに商業農場の設立にともないダサネッチで完結しつつあるのは近代国家への包摂過程である。近代国家への包摂は一回的な出来事としてではなく、一連の過程において進行する。その過程は、国家への領域面での包摂、法制度面での包摂、認識面での包摂、という三つに分けて考えることができよう。ダサネッチは、19 世紀末にエチオピア帝国に軍事征服され、20 世紀初めのエチオピアと英領植民地との境界形成の際に、その居住地域の大部分はエチオピア領域内に包摂された。法制度的には、帝政時代にはエチオピア中心部とは異なる政治体制が適用されていたが、20 世紀後半に軍事政権が成立すると、名目上ではあっても高地地域と同様の法体系が均質的に適用された。しかし、国家への包摂が真に貫徹するためには認識面での国家への包摂が不可欠である。ここでいう認識的包摂とは、自分たちの生きる世界が自己完結した世界ではなく、より広い国家の領域と法制度の一部でしかないことを、その当人たちが認識することである。現在のダサネッチは、この認識的包摂の最終局面にあると考えられる。

「家畜の人」としてのわたし

もっとも、この周縁性の自己認識化だけでは、ダサネッチの自己認識の変化の反面しか示したことになる。別の半面を示す発言は、「わたしは家畜の人(*maa aaniet*)だから」というものである。ダサネッチの人びとにとって、エネルギー摂取のうえで農耕と牧畜はどちらも欠かすことができないが、彼らは近隣の農牧民と同じように家畜、とくにウシに高い文化的価値を置いている。そのダサネッチがみずからを「家畜の人」と位置づけることはあたりまえ、と感じるかもしれない。しかし少なくとも 2006 年までの調査の過程で、彼らが筆者に対して「自分たちは家畜の人だから」という表現を用いて、自己の行為選択の理由を説明づけることはまれであった。それが 2009 年 8~9 月の滞在時には、この表現を頻繁に耳にするようになった。それは、つぎのような文脈においてである。

語り(2009/8/20、50 代男、ニゴロモギン)

高地人に土地を与えることは反対だった。家畜の土地だからだ。家畜を放牧するための土地だ。ニモルはカネを食べて与えてしまった。自分は高地人から農地を与えられていない。自分は家畜の人だからいらない。

語り(2009/8/27、30 代男、ヘレニゴロモギン)

給料を得てもブルにミルクはない。家畜を増やせばいつもミルクを持つ。モロコシがなくて

もミルクがある。だから農場で働くより家畜がいい。自分たちは監視人にならない。私は家畜の人だからだ。農場は望まないのだ

ここで注目すべきは、「(農場の)農耕」と「牧畜」を明確に対比した語りがなされている点である。このように二つの生業を明確に対立させる語り方は、筆者の知るかぎりこれまであまり存在しなかった。この変化の背景には、農場建設にともなう二つの生業の関係の変化が存在する。従来の氾濫原農耕では、仮に耕作地に家畜が侵入してそれを食べてしまっても賠償金を支払う必要はなかった。むしろ、畑の所有者がこの侵入に対して家畜などを叩きけがを負わせた場合、家畜の所有者に弁償する必要が生じた。また収穫が終わると、その茎や葉は家畜に食べさせていたし、収穫したモロコシは小家畜などを得るための重要な交換財であった。ここでは、「牧畜」が「農耕」に優越していることは自明であり、その基礎の上に両者が共存していたのである。このような状況下で、人びとはあえて「農耕」と対比しながら「家畜の人」であることを自己言及する必要がなかった。

それに対して新たに作られた商業農場では、農地に家畜が侵入すると家畜所有者が賠償を迫られるという根本的な逆転が生じている。そして、第5節でみたように収穫後には残った茎や葉は高地人により回収され、ダサネッチの家畜は食べることができない。またカネで支給される給料は、酒や穀物を買うために費やされてしまい、小家畜を購入することもできない。つまり、「牧畜」と排他的関係にある「農耕」、「牧畜」に優越する「農耕」が登場してきたのであり、この状況下で、「家畜の人」としての自己主張が顕在化してきたのではないかと考えることができる。

とくに興味深いのは、しばしば「近代化」を促進する主要アクターと考えられている若い世代の男性が、「牧畜民としての伝統」を主張していることである。もちろん、これは無時間的な「伝統」の確認ではなく、新しく外部から導入された農場に対する、そして農場と手を結び「家畜の土地」を手放してしまった、本来なら「伝統」を担うべきニモルに対する差異化の表明である。そのことは、「愚かな人びと」と語られるときにはその主語が「われわれ」、つまりニモルをその頂点としたダサネッチ全体であるが、「家畜の人」と語る際には、その主語は「わたし」に特定されていることから明らかである。

ダサネッチの若者は、家畜に関しては自分たちが「知識と経験のある人(*maa inyasich*)」だという自負はいまでも有している。彼らは、自分たちがより広い外部世界の一部を占める存在でしかなく、さらにそのなかで「愚かなわれわれ」が周縁化されていることを痛感しながら、同時に自己を「知識を有した人」として再定位できる「家畜の人」と位置づけることで、外部世界との新たな関係形成に向けて自己認識を調整しつつあると考えることができよう。

もちろん、以上の議論は農場付近に暮らす千人程度のダサネッチに該当する議論であり、農場から遠く離れた地域に住むダサネッチには該当しない。そして自己認識の変化は、農場建設により突然引き起こされたものではなく、彼らが19世紀末にエチオピア帝国軍に軍事征服されて以来進んできたものであり、とくに1980年代半ばの町の建設による高地人との接触の機会が増えるなかで進展してきたものであろう。しかし、自分たちの利用してきた土地を奪われるという劇的な経験が、彼らの自己認識の転換を大きく促進したことはまちがいない。そして、ダサネッチランドのほかのいくつかの地域でも新たな農場の建設が予定されている

ことから、以上の議論は多くのダサネッチが近い将来に経験するかもしれない認識面での変化を先取りしている可能性がある。

おわりに

エチオピアでは19世紀末以降、国家の中心を占める北部の高地地域が、西部や南部のより高度の低い地域を政治的に周縁化し、そこからさまざまな資源を収奪していく政治体制が築かれた。第1節で触れた牧畜地域の大部分も、この南部地域に位置する。ダサネッチやその近隣地域からは、象牙や奴隷、家畜などが中央に流出していく一方で、人びとの生活向上に資する政策はほとんどなされてこなかった。その収奪的な高地から、ダサネッチやその近隣集団の土地にもたらされてきた数少ない恵みの一つが水資源であった。高地で降った雨がオモ川を流れて彼らの土地に氾濫を起こし、それが豊かな土壌を運ぶことで、ダサネッチに豊富な穀物と牧草をもたらしてきた。現在ダサネッチの地では、この水資源すらもが中央への収奪の対象にされようとしている。川の上流部では、国内中心部や海外で消費される電力を生産するためのダム建設が進められ、下流地域に洪水が起こらなくなりつつある。その下流地域では商業農場の灌漑のために水が用いられて、そこで生産された作物はダサネッチの外部世界へと運ばれていく。ここに見てとれるのは、国家の最辺境部に位置するダサネッチからも、有用な資源を奪いつくそうとする政府と資本の運動である。

農場が建設されたことを契機に、ダサネッチの間には「家畜の人」としての意識が高揚しつつある。そしてこの「家畜の人」意識の顕在化は、なにより若者たちの不満の表明である。東アフリカ牧畜社会を対象とした多くの研究では、人びとが家畜中心的な価値観を抱えていることが強調されてきた。しかし、この価値観の形成過程が歴史的な視点から検討されることは少なかった。近代国家は牧畜社会をその領域に包摂して以降、繰り返し農耕化や定住化を促進する政策を遂行してきた。本論が示唆するのは、この外部からの脱・牧畜化政策に対する反作用として、人びとの間に牧畜民意識が強化されてきた可能性である。

ダサネッチと農場の間には、まだ暴力をともなった衝突は起きていない。しかし、適切な説明を経ずにダムや農場の建設を進めたことで、中長期的には地域住民の不満を蓄積させ、その不満が「家畜の人」意識の強化へと収斂することで、政府や農場との対立が先鋭化していく可能性がある。農場建設に関してはそのような徴候があることを示したし、今後農地が拡大する過程でそれはますます拡大するだろう。ダム建設も完成が近付きその影響が顕在化するにつれ、人びとに大きなはく奪感を生じさせる可能性がある。年長者などごく一部の住民との協力のみによって進められる事業が、長期的に持続可能なものでありうるのかは、若い世代がトップダウン型の開発プロジェクトに今後どう対応していくかにかかっている。

謝辞

本論のための現地調査にあたっては、文部省科学研究費補助金「アフリカ牧畜社会におけるローカル・プラクティスの復権/活用による開発研究の新地平」より、本論の印刷にあたっては、京都大学 G-COE プログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」より、それぞれご支援をいただきました。ここに記して謝意を表します。

参考文献

論文・報告書

- 佐川 徹 2007 「災いと恵み」 『エチオピア・フィールド・ステーション便り』 新年特別号
- _____ 2009 『東アフリカ牧畜社会における戦争と平和の動態』 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科博士論文。
- Almagor, U 1978a *Pastoral Partners*. Manchester, Manchester University Press.
- Agriconsulting Spa.- Mid-Day International Consulting Engineers 2008 *Gibe III Hydroelectric Project: Environmental Impact Assessment Additional Study of Downstream Impact*.
- Anderson, D.M 1988 Cultivating pastoralists. in D Johnson & D.M Anderson (eds), *The Ecology of Survival*, pp. 241 - 260. London, Westview Press.
- ARWG (Africa Resources Working Group) 2009 *A Commentary on the Environmental, Socioeconomic and Human Rights Impacts of the Proposed Gibe III Dam in the Lower Omo River Basin of Ethiopia*.
- Ayalew G 2001 *Pastoralism under Pressure*. Maastricht, Shaker Publishing
- Beruk Y 2008 Natural resource and environmental management considerations and climate healing steps in Ethiopia. in Pastoralist Forum Ethiopia *Proceedings of the Fourth National Conference on Pastoral Development in Ethiopia*, pp. 60-91. Addis Ababa, PFE.
- Campagna per la Riforma della Banca Mondiale and CEE Bankwatch Network 2008 *The Gilgel Gibe Affair: An Analysis of the Gilgel Gibe Hydroelectric Projects in Ethiopia*. Roma.
- CESI Spa.- Mid-Day International Consulting Engineers. 2009 *Gibe III Hydroelectric Project: Environmental and Social Impact Assessment 2008*.
- FDRE (Federal Democratic Republic of Ethiopia) 1995 *Constitution of the Federal Democratic Republic of Ethiopia*. Addis Ababa, Federal Negarit Gazeta.
- Getachew K.N 2001 *Among the Pastoral Afar in Ethiopia*. Utrecht, International Books.
- Hathaway, T 2009 *Facing Gibe 3 Dam: Indigenous Communities of Ethiopia's Lower Omo Valley*. International Rivers.
- Hangman, T and A. Mulugeta 2008. Pastoral conflicts and state-building in the Ethiopian lowland. *Africa Spectrum* 43(1): 19-37.
- Helland, J 2006 Pastoral land tenure in Ethiopia. *Colloque International "At the Frontier of Land Issues"*.
- Hogg, R 1987 Settlement, pastoralism and the commons. in D.M. Anderson and R.H Grove (eds.) *Conservation in Africa*, pp. 293-306. Cambridge, Cambridge University Press.
- International Rivers 2009 *Fact Sheet: Gibe III Dam, Ethiopia*. Berkley, International Rivers.
- Kassahun K 2004 The social dimensions of development-induced resettlement. in A Pankhurst and F Piguet (eds.) *People, Space and the State*, pp. 447-478. Addis Ababa, Addis Ababa University.
- Melesse G 2004 The effects of investment on the livelihoods of the Tsamako in the Waito valley. in A Pankhurst and F Piguet (eds.) *People, Space and the State*, pp. 264-284. Addis Ababa, Addis Ababa University.
- Mohammed M 2004 *Case Study on the Pastoral Affairs Standing Committee of Ethiopia*. NRI/PENHA Research Project.
- Mohammud A 2004 Pastoral development strategies/ policies in Ethiopia. in Pastoral Forum Ethiopia

- Pastoral Development in Ethiopia*, pp. 37-61. Addis Ababa, Pastoralist Forum Ethiopia.
- Population Census Commission 2008 *Summary and Statistical Report of the 2007 Population and Housing Census: Population Size by Age and Sex*. Addis Ababa, UNFPA.
- SNNPRS (Southern Nations Nationalities and Peoples Regional State) 2006 *South Omo Floods*. Awassa, SNNPR, Regional Rescue, Resource Mobilization and Rehabilitation Committee.
- Taffesse M 2000 An overview and analysis of the history of public policy towards the development pastoralism in Ethiopia. in Pastoral Forum Ethiopia *Proceeding of the National Conference on Pastoral Development in Ethiopia*, pp. 33-41. Addis Ababa, Pastoralist Forum Ethiopia.
- Turton, D 2003 The politician, the priest and the anthropologist. *Ethnos* 68 (1): 5-26.
- Yacob A 2000 Pastoralism in Ethiopia. in Pastoral Forum Ethiopia *Proceeding of the National Conference on Pastoral Development in Ethiopia*, pp. 26-32. Addis Ababa, Pastoralist Forum Ethiopia.

新聞・雑誌記事（ウェブ上のものを含む）

- Addis Fortune 2009/9/27 Investors pleased with vast land grants from Fed, by Wudineh Zenebe.
- _____ 2009/10/4 Amibara to purchase aircrafts from cessna on credit from US Exim Bank at a cost of 2.2m dollars, by Wudineh Zenebe.
- _____ 2009/12/6 Land giveaways broaden.
- _____ 2010/1/25 Awash Irrigation to Help Pastoralists Settle.
- BBC News 2009/3/25-26 The Dam that divides Ethiopian, by Peter Greste.
- Capital 2009/9/13 Capital top 25.
- Daily Monitor 2009/7/30 SNNP developing Jatropha, Castro Bean, Palm Oil.
- Daily Nation 2009/7/9 Ethiopia: Govt to build Fourth dam on River Omo, by Argaw Ashine.
- Ethiopian Review 2009/4/30 Africa not benefiting from foreign land deals – AU official.
- _____ 2009/6/8 Ethiopia: Indian Company launches multi-million birr agro-investment project in Gambella.
- _____ 2009/6/10 Inside the barley republic: Ethiopia's land on fire sale, by Alemayehu G. Mariam.
- _____ 2009/11/20 Ethiopian 'virgin land' for sale, by Andrew Rice.
- _____ 2009/12/4 Foreigners are buying stolen Ethiopian land, by Fekade Shewakena.
- _____ 2009/12/31 Ethiopia sells fertile land to foreigners as its own people starve.
- Genet 2009/8/12 International agricultural land deals award Ethiopian virgin lands to foreign companies.
- Grain (seedling magazine) 2010/1 Africa's land and family farms-up for grabs?, by Joan Baxter.
- International Rivers 2009/9/18 African Bank to Investigate Ethiopian Dam Concerns, by Lori Pottinger.
- _____ 2010/2/5 Press Release: Ethiopian dam suffers tunnel collapse days after inauguration.
- _____ 2010/5/13 Press Release: China's biggest bank to support Africa's most destructive dam.
- L'Hebdo (Switzerland) 2009/9/3 Ethiopia. Now is harvest time, by Julie Zaugg.
- Los Angeles Times 2009/5/14 Big dam, bigger problems.
- Reuters 2009/7/31 Ethiopia sets aside land for foreign investors, by Tsegaye Tadesse.
- Survival International 2010/2/25 'Open the dam and let the water flow' – desperate plea from Omo Valley.
- The Ethiopian Herald 2010/1/1 Company developing palm oil trees.

The Guardian 2010/1/15 Ethiopia: Farmers starve as govt sells land to foreigners, by Xan Rice.

The Japan Times 2010/4/4 Japan, please don't go grabbing Ethiopians' land, by C.W Nicol.

_____ 2010/4/11 No land grab in Ethiopia, by Abdirashid D.

The Standards 2009/3/3 Ethiopian dam project could kill Lake Turkana: A severe threat from across the border in Ethiopia.

_____ 2009/4/5 Leader protest Ethiopia's diversion of River Omo.

_____ 2010/1/21 Why residents want Ethiopian dam on River Omo stopped urgently.

Voice of America 2010/1/28 Activists, researches raise alarm on Africa's 'land grab', by Nico Colombant.